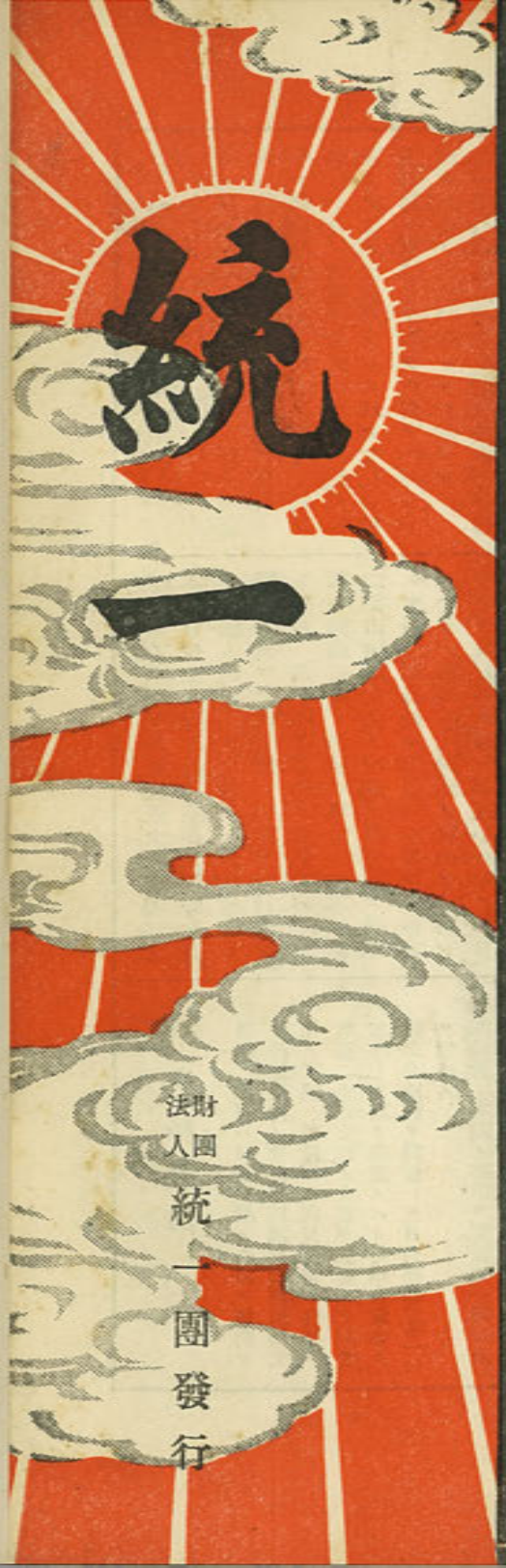


目次

佛教の根本と其の應用（其六）……本多日生
開目鈔講話（承前）……小林一郎
支那事變と皇軍の戰略戰術……三原敏男
日蓮宗概觀……梶木顯正
佐渡の聖蹟を訪ねて……磯部滿事
日珠上人小傳
記事
○本團部報　○團費誌料寄附金及維持費領收

第四十三年　十一月號

13/11-18

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間內ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク高代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歷史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法息國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ每月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ涵養ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎**贊助員**　一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用（其六）

本多日生

悉有佛性

さうして其處にもう一つ哲學的の意味を附加へて云ふならば、その人間の心の本質がどう云ふ風になつて居るかと云ふ問題である。これが叩いても磨いても立派なものにならない、續いては行くけれども何時もやり損ひを繰返すもので、どう据付けても光りも發せず間違はぬやうに出來ないもの、分り易く云へば段々惡くなつてしまふと云ふ品物ならば、これは絕望である。併し据所に依つては非常に立派な光を發する、斯う云ふ性質が心であるや否やと云ふことが問題である。これから突究めて行かなければならぬ、所が法華經などに於ては明瞭にその事がなつて居る、一切衆生悉く佛性があるからして、それを開く爲めに佛が世に出で給ふたと云ふ一大因緣と云ふことを說かれたが、阿含の教が矢張りさうなつて居る。最初釋尊成道の時に、最早法を說かずして涅槃に入らうかと考へられた、それは衆生が餘り

に心に汚れが多い事故に、これを教化しやうとしても中々教化の効果はなからうかと云ふことをお考へになつて、そこで涅槃に入らうとも考へられた。けれども折角人々を救ふ爲めに成道を遂げて少しも法を說かず涅槃に入るのも殘念ぢやと云ふので、心殘りであるからと云ふので、更に衆生を見直し給ふた疾く涅槃に入らんやと考へられた、その儘に涅槃に入られたら佛法と云ふものは起らなかつた、何も宗旨なんと云ふものは無い、念佛・眞言もありはしない、釋迦牟尼が再び人々を見直した時に、有難いことには人々の中に非常な尊い値打を發見し給ふた、それは阿含に說かれて居る、法華經にもさう云ふことを說いてある。增一阿含の中には、能く見た所が、人々は根本は濟度し易きものであつて、恰度泥の中に蓮があるやうなものである。併し教を聞かざるが故に法の眼を失つて迷つて居るのである、導くに教を以てすれば必ずや芽を吹いて佛性が現はれて來る、泥池の中に蓮根があれば遂に芽を吹いて花の開くが如きものである。そこで蓮のことに大變に力を入れて說明せられて居る、蓮が泥水の中に潛んで居る時はまるで泥ばかりだけれども、芽を吹いて出て來る、まだ水の上に出でない、だん〳〵伸びて水の上に出てそれから花を開く、この順序などに非常に力を入れて說明されて居る、それは人々の心を考へたならば茲にものを考へる必要があるので、蓮根が泥の中に腐つて居るか居らぬか、少しでも芽を吹けば實に愉快なことである。その善心の萌しの芽をパッと吹き伸びたなと云ふことになれば非常に有難いことなので、それが泥水から上に出たと云ふことになれば、それは人格と云ふものは偉いことになつて、

汚い精神は下の方に行つてしまふ、さう云ふ風の順序を非常に力を入れて說明をせられた。併し嬉しいことには一寸芽を吹いただけでも、その芽は泥の中にあつて泥に汚されない、蓮の水にあるが如しと云ふことは、汚れた人生に處してもその汚れを受けぬと云ふことで、どんな泥の池の中でも蓮が芽を吹いたらば、その芽は少しも汚れを受けない、不思議なものである。人間が泥のやうな精神の中でも、善心と云ふものは決して汚されるものではない、泥棒人殺しをしたやうな重罪犯人でも、それが改心をして監獄の中でも善心が芽生えたらば、その芽生えた心だけは一寸の汚れなき淨き所のものであると云ふことが言へる。茲に望を囑して教を與へればその芽が吹いて出ると云ふことから進んで參る、これが人々の心に佛性がある、阿含の方では本性と云ふてあります、本性清淨と云ふのであります、それが中々の議論でありまして、阿含のお經ばかりではない、その後諸師の論書と云ふものは必ずこの問題を論じて居るのである、成實論と云ふ阿含に關する大事な論書の中にもその事を力を入れて述べてある、或人は心性本淨なり——心の性は本淨し——と云ふことを言うて居る、それが客塵を以て、の故に不淨なり客塵と云ふのは居候である、主人は淨き者であるが、居候が塵を撒くに依つて心が汚れるのであると云ふ風に、汚れの方を客と書いてある、そこが佛教の見方の偉い所である。これを基督教などで見れば罪の子と、唯斯う云ふてしまふのである、その言ひ方の粗末なことが直ぐ分る、罪は外からしたのであるから、神の子であるならばその人間の心本性清淨でなければならぬ、蛇に騙されたなどゝ云ふことは

外から來たのであるから、これは客塵と云はなければならぬのに、いきなり人間を罪の子〳〵と云うて居る、そこが教として下等なものである。淨土門でも吾々をたゞ罪の者である、强突く張りの婆さんが青鬼に取ッ捕へられて居る繪を見せて、ソラこないになるから阿彌陀樣に縋らなければならぬと云うて脅かして居る。人間は下等なことで脅かす方が信仰に入り易い、西洋人は罪の子でやられる、こちらは阿彌陀經に依つて罪の者、ソラ鬼に引張つて行かれると云ふ事でやつたけれども、今後の積極的に進み行く人間は、人間の本性が善である、尊いものだと云ふ方で啓發しなければならぬのである。それは儒教では荀子と云ふ人が性惡を唱へ、孟子が性善を說いた、併し孟子が勝つて荀子が負けて人の性は善なりとなり、中庸と云ふ書物には『性に從ふこれを道と云ふ』と云ふて人間の本性と云ふものは善だと云ふ風に說いたのが聖人の教である。古い話だけれどもそれが大事なことで、今世の中が腐つて行くのは自然主義などと云ふことを言つて、酒呑の根性であるとか、泥棒の根性であるとか、嘘付であるとか云ふ醜惡なるものを本性、自然の性と云ふてこれを許すから、自然主義と云ふたならば色々さう云ふ劣惡なる事をやるのを自然主義と云ふことになる、人間の自然が淨いものならば、自然主義と云ふのは反對に道德や宗教のことを云ふのである。今日皆さんがお寺に參つて居る、これは自然主義で、それを惡い方が自然であると云ふ事になつた爲めに、この自然主義の文學の影響が人間を墮落と云ふものに陷らしめる。勞働問題なども利權爭ひをして喧嘩するのが文明の進步だと斯う云ふことになつて、喧嘩したり

ストライキをしたり、面倒な複雜なる汚れた人生を以てこれを當然とする事になる、人間の心が惡いものので汚れたものであるならば、さう云ふものが出て來るのが當然である。犬の世界であるとか、鼠の世界、蛙の世界であると云ふことになれば、それは彼等はギャー〳〵云つて飛んだり跳ねたりするのが當然と云ふことになる。人間の本性を善と云ふものにすると、もつと氣の利いた人生を造らなければ濟まぬと云ふ反省と云ふものが玆に起つて來る、出發點は其處にある、それをお釋迦樣はすつかり見定めをつけられた。さうして踏留つてこれ等衆生を教へてやらうと云ふので、その時に人間の性は善なり佛性ありと云ふことを哲學的に論證をせられた。それは有らゆる方法から證明されるのであつて、現に人の心を研究して如何に惡く見える人間の心にも善心を持たぬ者はない、泥棒人殺しのやうな重罪犯人でも女房や子供は可愛がる、鬼熊のやうな者でも一目自分の女房子供に會うて死にたい、どうか俺はもう諦めて死んで行くから女房子供の事は兄貴宜しく賴むと云ふやうなことを言ひましたが、鬼熊のやうな者でも善心と云ふものは皆ある。如何なる兇暴な者でもチャンと善心と云ふものはあると云ふことをお釋迦樣は證明して、殊に惡い奴を教化して手本を示さうと云ふことに努力せられた。央堀摩羅とか、阿闍世とか、其他兇暴なる最早佛性などは何處にも殘つて居ないと思ふやうな者を提へて、佛はこれを濟度せられた、或は鬼婆と云はれて居るやうな、人の子供を叩き殺して喰つて居るやうな婆さんを集めて、さうしてそれを教化せられた。斯くして如何なる人間でも人間である以上は、善心と云ふものはその人

間の本性であると云ふことを立證されたのである、徹底的にこれを證明された。それであるから法華經に至つては、如來が世に出現して働いたのは一切衆生に佛性があるから、これを人にやう之を示してやる爲めに働いたのである、それを一言にして云へば佛教はその事に働いたのである。斯う仰しやつたのである。左樣にして考へて見ると云ふと、そこに吾々の本質が實在であり、さうして佛性を具へて居るやうなる說明は、これを最後に信ずる場合は、智慧の心がこの信仰を維持して居るのであつて、教を聞いて信仰を起すと云ふ、この教を聞いて信ずる時には相當に慧心と云ふものが働いて居る、それなくしては佛教の信仰に入ることは出來ない、尤も佛教でも不動樣や帝釋樣を拜んだり、たゞ病氣を治して下さいと云ふことを言ふて居る者は、そこに慧心と云ふものはなからう、それは迷信であるから、それは佛法ではない、本當を云へば不動さんに火事を守つて下さい、帝釋樣に病氣を治して下さいと云ふやうな、お經にもなければ理屈にもない事を信心であると言つて廻つて居るのは、それは何も佛法ではない迷信的信心と云ふものである。そんな事は學問する程な者は問題にならぬ事である。それを知らぬ顏をしてオメ〳〵まつて居るのは餘程良心の麻痺した泥棒か詐欺師の兄弟分のやうな奴がやる事で、眞人間の出來る藝當では斷じてない。苟も如來の御教を傳へると云ふことになつたならば、如何なる低き所から高き所に行くのでも今云ふやうなことを言はずしては行けない、迷信振つたやうなことを言ひ得らるべき性質の教ではないのである。

行者の安心

そこでこの教を聞いて信心を起すと云ふことに佛は始終仰しやつて居るが、その信心と云ふものはどうなるかと云ふと、今申す智慧の心から導かれて、それが信心は主に云へば安んずるの心でありますから、信は安住するの心で落付いて居据る、居据りの上に誠に氣分が宜いと云ふ慰められたる心、安んずる心である、それが信心、これは有難い、もう何の事にも狼狽へる事もない、此處と云ふ見定めが付いて行く、その心の据りが極まつた所が信心である、だから人の信心はどうなるかと云ふと、只今申した我心は亡びないものであり、さうして善心を起せば、その善心の結果に於て自分は亡びない、生命がだんだん善き果報を得て行くと云ふ因果應報の理りを併せて信ずる、それが第一にこの因果律と云ふものがそれに附いて來ることを信ずる所にこの宗教の信仰と云ふものは起つて來るのである。惡事を爲せば惡業の結果は苦しみとなり、善根の結果は幸福となり、己れを正に導いて臭れると云ふ業の力を信じて行くのである、それが佛法信仰の出發點である、その善行と云ふものが澤山あるけれども、先づ自分の心を清くし正しくして、さうして自分を導いて下される所の力、即ち佛樣を仰いで信ずる、お釋迦樣が自分等を導き教へて下さる、守つて下さる、お釋迦樣に縋れば自分が善い所に導かれ、さうして自分の足らぬ所を補うて助けて下さると云ふ導かれる救はれると云ふことに就て信心と云ふものが起る、併し

それは唯佛の力を信ずるのではない、自分に左樣にして善を行ふ力があり、自分に能力があると云ふことを第一に信ずる。佛敎は自分に能力が無いからと云うて佛に縋つたのではない、いきなり他力するものではない、今の心が一念善を生ずれば非常に立派なものになる、一念惡をなせば地獄に墜込むと云ふことが出發點であるからして、自分に往生すべき能力がある、因果應報の理に依つて行くべき筋道がある、そこへ佛が手傳つて、佛が入つて力が加はると云ふことは、即ち自分の能力に對する手傳ひである。馬鹿な者が學校の先生にものを敎はると云うて無暗に與へられるものではない、これを啓發すれば立派な人間になると云ふ一つの能力があつて、さうして先生に依つて導かれるのである。病人が醫者に行つて病氣を治して貰ひたいと云ふ、癒る能力があるから醫者に藥を與へられて癒る、醫者が助けると云ふことは癒り得る能力を助けるのである、どの位の名醫であつても、もう癒り得ないと云ふ時分に於て、血の氣もなくなつてしまつて居る者を幾ら藥をやつても駄目だ、能力のあると云ふことを佛敎は先づ信ぜよと云うて居る、自力々々とこれを蔑してしまふと云ふことは、醫者に對し醫者の藥だけで病氣が癒ると思つて、病氣のことを考へぬと同じこと、先づ第一に自分の體力と云ふものがあつて、これを冒して居るところの病を除けばそれは健康になるのである、除く所は醫者だけれども、その能力と云ふものは自己にある、それが佛敎である。佛敎にさうペコ〳〵すると云ふことは大切なことではない、いきなり頭を下げて來いとはお釋迦樣は言はない、佛樣の前に行つて貴樣は何者だと云ふ酔ッ拂ひ見たやうなことは言はない、正々堂々と自己の能力を信じて、さうして因果應報の道理を信じて佛樣を仰いで從うて導かれて、足らざるところは救はれて行くと云ふことに依つて感應道交するところが佛敎と云ふものである。それであるから信心と云ふことに就ては佛樣を考へることに依つて行くのである。その佛樣は言ふ迄もなく、もうお釋迦樣に決まつて居るのである、何も宗旨が違ふからお釋迦樣であつたり、阿彌陀樣であつたりすると、さう云ふ譯のものではない、そんな事は直ぐ分る事である。その事を詳しく說いたのが法華經の壽量品でありますが、阿含の最初からさう云ふことは決まつて居ります。

爾今每週火曜日晩本部講堂に於て

小林一郎先生の立正安國論講座を開始す。

銃後後援の强調は實に國民精神作興にあるべく、之を涵養するは必ず明敎に據る。迷ふ莫れ、速かに來つて聖者の師子吼を聽け！

財團法人 統一團

開目鈔講話（承前）

小林一郎

斯ういふ譯でありますから、お釈迦様御一代の八相といふものは、吾々に活きたお手本である。お說きになる教が尊いばかりでない、お釈迦様の御一代が活きた教だといふことが考へられるので、吾々は佛のお說き遺しになつた教を學ぶと共に、佛の身を以てお示し下さつたお手本を學ぶといふ心持でなければならないのであります。

さういふ佛様が、吾々のこの娑婆世界に生れて下さつたといふ有難いことを思ふならば、この娑婆世界に特に緣のある釈迦牟尼佛の恩を忘れて、成程佛は澤山あるだらうが、この釈迦牟尼佛を捨て置いて他の佛に歸依することは出來ない筈である。それでは佛の恩に感ずるといふ心持がない譯である。だから有ゆる佛は一つの佛の現はれたものに相違ないけれども、この娑婆世界の吾々に特に緣のある、身を以てお手本をお示し下さつた釈迦牟尼佛に歸依する程いゝ信仰はない。この釈迦牟尼佛に歸依するといふことが、有ゆる佛に歸依するといふことです。だから他の佛を、阿彌陀様であらうが、大日如來であらうが、それは孰れも尊いものであるから、その佛様を卑しめる必要はない、やはり佛として尊敬する心持はあつていゝ譯です。そこは思ひ違ひがあつて

はならない。『お釈迦様を信じて居れば、阿彌陀様などは足で蹴飛してもいゝ……』そんな莫迦なことを言ふには及ばない。やはりそれは佛様だから、たとひ吾々に直接緣がなからうとも、侮つたり、辱めたり、輕んじたりすることはない。自分の信仰の中心を一つチャント決めて置いて、その他の尊いものは尊敬するといふ心持を持たなければならない。それが非常に大事なことであります。さうでないと、宗教といふものが固陋なものになつてしまふ。『俺は法華だから阿彌陀なんか蹴飛してしまへ』『俺は念佛だからお釈迦様などは掃溜に投げ込んでしまへ』それではいけない。佛は尊いものに相違ないから、自分の信仰の中心をシッカリ決めて動かないやうにする、さうして尊いものは尊敬するといふ心持は持つて居らなければならぬ譯であります。この辨へがつかないと、時々變なことになつてしまふ。『俺は法華を信じて居るから八幡様でも天神様でも構はない、そんなものに頼みはしない、頭も下げない』といふことになるのでありますが、それは信仰の中心をしつかり立てると同時に、尊敬すべきものを敬ふといふ、そこの區別が立たぬではいけない。そこが大事なところで、信仰はシッカリしなければならないけれども、又あまり固陋になつて、譯が判らないやうになつても困ります。

さういふ譯でありますので、吾々は釈迦牟尼佛に歸依するのであります。それが唯一絕對の本佛の現はれたものとして歸依するのですから、そこで『過去常顯はる』で、過去から常住であるところの佛様が、釈迦牟尼佛となつて、この吾々の世に姿を現はして下さつたといふことが判つた時に『諸佛皆釋尊の分身』である。この釈尊といふのは、根本の一つの中心の佛がいろ〳〵な身に分れて佛様になつて、娑婆世界に現はれたのである。又過去、現在、未來を通じて、十方世界を通じて、いろ〳〵な佛になつ

て教をお説きになつたといふことが判るのであります。

爾前、迹門の時は諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛なり。かるがゆへに諸佛を本尊とする者釋迦等を下す。今華嚴の臺上・方等・般若・大日經等の諸佛は、皆釋尊の眷屬なり。佛三十成道の御時は、大梵天王・第六天等の知行の娑婆世界を奪取給ひき。今爾前迹門にして、十方を淨土とがうして此土を穢土ととかれしを打かへして、此土は本土となり、十方淨土は垂迹の穢土となる。

これは壽量品に至つて初めて説かれるので、若し壽量品が説かれない前の、序品から安樂行品までの十四品を讀んだり、或はまだ法華經が説かれない前の經ばかりを讀んで、それだけで濟ませるといふと

諸佛は釋尊と肩を並べた佛樣である。その佛樣は銘銘に修業をして、銘々世の中に出て教を説かれたのだから、さうすると阿彌陀樣を信ずる者はお釋迦樣を詰らぬと言ふ。大日如來を信じて居る者はお釋迦樣を詰らないと言ふ、いろ〳〵な佛を本尊とする者が釋尊を下して、お釋迦樣は詰らぬ〳〵と考へる。今華嚴經にある蓮華台上の佛、方等經、般若經、大日經等の佛樣といふもの、これを皆一番上のものだと思つて居るけれども、法華經壽量品を讀んで見ると釋尊の眷屬である。根本の唯一つの佛樣がいろいろな佛になつて現はれた、その一つの根本の佛に屬するものと考へなければならない。お釋迦樣が三十歳でお覺りになつた時には、大梵天王とか、第六天といふやうな天が護つて居るところの娑婆世界を取り上げて、自分がお救ひになつたと思はれたけれども、さうではない。本當に考へて見れば、梵天でも第六天でも、佛、即ち根本の唯一つの佛樣に救はれて、常に自分達の心に穢れがなくなつて、さうして世の中を守護するといふ働きもして來たのであるから、どつちが根本かと言へば、お釋迦樣が根本だといふことを知らなければならない。

それは法華經の壽量品に至つて初めて判るのであります。それより前はこの土を穢土といふ、この娑婆世界が穢い處で、穢土を離れて淨土を求めなければならないと言はれたのを、壽量品に至つて打かへして、此處が本土だ、娑婆世界に於て淨土が實現されるのだ、お釋樣迦は遠い昔から既にこの娑婆世界に居つて、幾度か〳〵大勢の者に教を説かれて、その一番終ひに印度の國王の子として現はれて教を説かれ、今迄の教の締括りをする、これを經めることになるのでありますから、さうするとこの世が本當の佛の淨土であつて、寧ろ十方の淨土といふものが却て佛が假に姿を現はした場所となつてしまふのである。それであるから法華經の神力品には、十方世界の者が皆掌を合せて、この世界に向つて『南無釋迦牟尼佛　南無釋迦牟尼佛』と言つて禮拜したといふことがある。それが本當で、此處が淨土になるべき處であるといふことが、神力品の中には言つてあるのであります。

しかし法華經で説かれる前に、この世を穢土と言はれたことは無意味ではない、そこをよく考へなければならぬ。人間が病氣をして居りながら、自分が病氣だと氣がつかなければ不養生して死んでしまふだからお前は病氣だ、ウツカリして居てはいけないぞといふことを教へて、それから自分が病氣だといふことが氣がつけば、良い藥を服んでこれを治すといふ順序にならなければいかぬ。それだから法華經以前に於て、この世が穢土だと説かれたことも、決して無意味ではない。ウツカリして居ると吾々は譯が判らずに死んでしまふ。金がないと金があつたら宜からうとか、身分が低いから出世したら宜からう

とか言つて居るが、そんなことばかり考へて一生が經つてしまつては生きる甲斐が無いといふことを教へられることも必要であります。お前は金が欲しいと言つて居るけれども、金で滿足はないぞ。地位を得たいと言つて居るけれども、地位が高くなつてもそれで滿足はしないぞ。お前は大きい家に住みたいと言つて居るけれども、いくら大きい家に住んでも幸福ではないぞ。要するにお前達の求めて居る幸福といふものは、實の道を得ることよりないのだといふことを說かれることが必要である。それを說かれないと『欲しい〳〵』で一生涯終つてしまふのです。それでこの世は穢土である、この穢土に於て滿足を求めていけないから、滿足しない心持を作つて、本當の淨土、本當の滿足、本當の平和のある處を求めなければならないといふことを說かれて、さうしてその淨土は何處にあるといふ疑問が起きた時に、法華經を說かれて、それは外にない、お前達の心の立方で、此土の穢い處が淨土になるのだといふことが說かれる。だから世を厭ふといふ思想は決して無駄ではない。世を厭ふことを知らない人が、決して善い事の出來る譯がない。西洋人がよく厭世思想はいけないと言ふが、これは淺はかなことです。この世の中を良いと思つたら、決して人間は進歩しやしない、この世は儚ない、つまらない、この世はいけないと思ふことは必要なことです。その厭世の心持の中を通り拔けて、初めてこの世を淨土にしようといふ大きな働きが働つて來るのでありますから、さういふ意味に於て、佛教に厭世思想があるといふことは無意味ではありません。この頃動もすると西洋人に負けまいと思つて、佛教に厭世思想は無いなどと言つて、躍氣になつて騷いで居る人があるが、そんなに西洋人が言つたからと言つて夢中になつてはいけない。厭世思想は確にある、厭世だから進歩があるので、これで滿足だと思つたら進歩はない。こん

なつまらない世の中、これでは仕樣がないと思ふから、何とかしてこれを善くしようと思ふのです。厭世思想はあつても少しも妨げはしない。しかしこゝで留つてしまつては駄目で一歩々々進んで行かなければならないのであります。それが所謂爾前といふ法華經以前の教と、それから法華經との關係であります。吾々は世の中がつまらないと思ふから、もつと良い世の中が欲しい、もつと良い世の中はどうしたら得られるか、それにはどうしたらいいか、自分達の信仰を立て直さなければならない。他の人をも正しい方に向けて、この世を寂光淨土、佛の住み給ふ淨土にしよう。斯ういふことに心が向いて行かなければならぬ筈であります。

そこ迄行つて初めて、この世の中は穢土であるとか、淨土を求めよとか仰しやつたことが、皆役に立つて行くのです。だから穢土を離れないで、これを打かへして娑婆世界を淨土にする。十方の淨土の方が垂迹の穢土になる、此土の方が根本の佛の居られる本土であるから、十方の世界は寧ろこの本佛の身を分けて現はれた所になるといふのであります。

佛久遠の佛なれば、迹化、佗方の大菩薩も教主釋尊の御弟子なり。一切經の中に此壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんが如くしてあるべきを。

斯樣に、佛が久遠の佛であつて、ズッと遠い昔から、世界の初めから佛で居らつしやるところの、永遠の命を有つた佛樣であるといふことが判れば『迹化』といふのはこの世に現はれて大勢を教化して下さつた佛樣、その佛樣も、また『佗方の』この世界ばかりでなく、十方の世界、他の世界に現はれた菩薩達も、永遠にたつた一つの佛のお弟子になつてしまふ。そこで初めて吾々は、本佛が吾々の世界に現

はれて下さつたお釈迦様の教に、絶對の信仰を捧げることになる。だから一切經の中に壽量品が示されなかつたならば、天に日月がないやうなものだ、國に國王がないやうなものだ、山や河の中に珠がないやうなものだ、人間に神がないやうなものである。

これは非常に大事なことであります。これは法華經を讃めるのに相待妙、絶待妙といふ考へ方があるといふことを前にも申上げましたが、絶待妙といふ意味がこゝに現はれて居る、一應法華經が勝れて居るといふのは相當妙の見方です。『相待』といふのは、他と比べてこちらが上だといふことです。今では相對的などといつて『對』の字を書きますが、佛教の方では『待』といふ字を書きます。他の物と比べる、華嚴經とか、阿彌陀經とか、大日經といふやうなものに比べて見て、法華經が深いものである。法華經の方が上のものだと、斯ういふ見方が所謂相待妙といふ見方です。法華經が說かれて初めて他の教が皆活き復つて來るのだから、皆役に立つて來るのだから、要するに法華經に依つて他の教が魂を與へられるのだ、皆價値を有つて來るのだ。それが絶待妙といふ見方です。これが本當に勝れて居る。外に比べてこつちが上だといふのはまだ本當に上ではない。法華經が皆包容して、他のものを皆活かして行く力があると考へてこそ、一番勝れて居るのであります。吾々は法華經といふものを二つの見方から見て居る。相待妙とも見る、絶待妙とも見られるそれで法華經の前の半分、即ち序品から安樂行品迄は相待妙である。何故なら壽量品に至つて、一つの佛樣が總ての佛の本だと言つて居らつしやるのだから、この時は相待妙ではない。壽量品に於て唯一つの佛、それが現はれて有ゆる佛になつたといふことを打明けられて、初めて絶待妙です。これ以外に佛樣はないのだ、この佛樣のお說きになつた教といふものが眞實である、法華經といふお經の中に總ての教が包容される、これに依つて魂を得るのだ、斯うなつて來ますといふと、そこで初めて絶待妙といふことが言へるのであります。だから法華經といふものは包容的である。壽量品には、根本の佛樣が佛になつて現はれることもあれば、佛でないものになつて現はれて、佛でないことをお說きになることもあると說かれて居りますが、總ての佛、總ての教は、皆一つの中心に依つて包容されて行くのであります。

それで有難いとか、尊いとかいふことには三つの考へ方があります。その一つは極く淺はかな考へで、何か斯う向ひ合つて居る、チョウド人と人とが向ひ合つて居るやうに、向ふが尊いから、向ふが力があるから、その方へ行く、斯ういふ意味です。宗教にも斯ういふ宗教がある。佛樣と向ひ合つて居る料簡で、向ふの方が偉いから、例へばお稻荷樣に詣るとか、不動樣に詣つてお賴みしようといふのは斯ういふ考へ方である。佛樣は自分と相對して、向ふが偉いから賴む、金が儲からぬから儲けさして呉れ、家が繁昌しないから繁昌さして呉れ、斯ういふやうに向ひ合つて居るやうな料簡で居る。それだから一つのものを拜んで效かないと、これではいけないと言つて又今度は別の方へ賴んで行く。『觀音樣を信心して居るがどうも御利益がない、もつと效き目のあるものがありさうなものだ、それぢや不動樣にしよう』『どうもお不動樣もいけない、今度はお地藏樣をやつて見よう』斯ういふやうに方々探して歩く。これは大きな世界の内に、自分と佛とが向ひ合つて居るやうな氣持で居るのであります。これが一つの考へ方であります。モウ少し進んで行けば、今度は超越的になつて、佛は自分といふものを離れて、チョウド上の方から吾々を見下して居るものだといふ、斯ういふ見方になる。吾々と向ひ合つて居るのでは

なくして、佛は高い所に居る。非常に偉いものだ、だから頭を下げて之に頼まうぢやないか、斯ういふ考になります。それからもつと考が進むと、佛の大きな力の中に吾々が入つて居る。佛様といふものは絶對のものである。その絶對の佛の内に吾々は含まれて居るのだといふ、チョウド初めとは逆になる譯です。だからそこに吾々が氣がつけば宜い。佛様の大きなお力が始終吾々を護つて下さつて居る。佛様のお力は吾々ばかりではない、有ゆる物を護つて居らつしやる、絶對の佛様だと氣がついて來れば吾々はどうしたつて歸依しないでは居られない、斯ういふことになる。これだけの道筋を通つて行くのであります。要するに宗教には斯ういふやうに三つの階段がある。極くつまらない宗教では、何時でも向ひ合つて居て、その相手に頼むといふことになつて居る。だから效き目がないとこれに愛想をつかしてしまふ。『法華を三年やつたが火事に遭つた、法華はもう懲り〳〵だ、今度は念佛だ』『念佛をやつたが子供が死んだ、念佛も懲り〳〵だ、今度は眞言をやつて見よう』といふことになる。斯ういふ風な考へ方と、それから大きな絶對の佛の力の内に入つて、それ以外に吾々は出ることが出來ないのだといふ考へ方、この二つは大變大きな違ひであつて、佛と對面するやうな料簡になつてはならないのであります。難かしく言へばいろ〳〵な言葉がありますが、極く常識的に申しますれば、さういふやうな違ひがあるのであります。

それで法華經が絶待妙の教だといふことは、絶對の唯一つの佛様を信ずるといふところから出て來るそこをよく現はして居ります。だから法華經がなければ人間といふものに魂のないやうなものだ。法華經があつて初めてお釈迦様の御精神が判り、又お釈迦様といふものが何故に教をお説きになつたかといふことの御本意も判るのであるから、さうして見

ると、法華經の壽量品を中心として考へた時に、佛の教といふものはみな役に立つて來る。幹があれば枝も幹と通ひ合つて育ち榮えて行くのと同じやうに法華經の壽量品が判つて來ると、佛が他の經の中に説かれてあること、皆それ〳〵の意味を有つて來るそれ〳〵の値打を有つて來るのであります。だから日蓮上人の如きは、法華經の信仰の上に立つて居らつしやるから、有ゆる經を自由自在に引いて居らつしやる。何の經の中には斯ういふことがある、これも尊い、あれも宜しいと言つて居られるが、決して日蓮上人があつちこつちへ心が動いて居る譯ではないので、法華經を根本として見ると、法華經以外に説かれたものもそれ〳〵役に立つて來るのです。さうなつて來れば實に尊いことであります。まア私なども出來ることならさういふ風に考へたいと思ふのです。自分ではどうもまだ研究も經驗も十分でありませぬから、そこ迄徹底した考が出來ませぬけれども、若しさうなればどんな物を讀んでも皆自分のものになるのでありますから、こんな尊いことはない譯であります。

華嚴、眞言等の權宗の智者とおぼしき澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往權宗の人人、且は自依の經を讃歎せんために、或は云く、華嚴經の教主は報身、法華經は應身と。或は云く、法華壽量品の佛は無明の邊域、大日經の佛は明の分位等云云

斯ういふ大事なことに氣がつかないで、根本の教を捨て置いて、他の經ばかりに信仰の中心を置くといふことはそれは間違つて居る。たとへば華嚴宗、眞言宗などの、方便の經ばかり持つて居るところの人にどれ程智慧があつても、たとへば澄觀・嘉祥・慈恩・弘法といふやうな、華嚴や眞言を信じて居る人は『一往權宗の人』と言つて、方便の經ばかりに

魂を打込んで居つて、法華經といふものが更にそれより超越したものだといふことに氣がつかない人である。斯ういふ人は、自分の宗で本にして居るところのお經を大勢の人に讀誦せしめて、これを尊いものと思はせようといふ、私の氣持がある。そこで或は華嚴經の中に說かれてあるお釋迦樣は報身であつて、法華經の中に說かれてあるのは應身であると言ふ。これは佛敎ばかりではない、世の中でも斯ういふことを言ふのであります。報身といふのは智慧の佛といふこと、『報』といふ字は『むくい』といふ字であつて、修行の結果智慧を成就すること。『應』といふのは一切の人に望に應じて現はれて敎を與へて下さる、その佛の慈悲の方面を應身と斯ういふのです。お釋迦樣が世の中に出て一切の人をお救ひ下さるといふのは、これは應身である。即ち一切の人の救はれたいといふ望に應じて出られた佛樣だ、斯ういふのです。それから華嚴の中には、お釋迦樣御自身の覺つたところをその儘打明けて居られるのだからこれは報身である。卽ちお釋迦樣は御自分の智慧をそこにスッカリ遺憾なく示された、斯ういふのが華嚴經の立場であります。智慧がなければ人を救はうとしても救へないから、智慧が本で、救ふといふことは智慧の應用的方面に過ぎない。斯ういふのでどつちが上かといふと智慧が上だ、智慧がなければ救へないのだから、智慧といふものがあつて救ふといふことが出來るのだから、智慧が本で救ひは末だ、斯ういふのです。それが華嚴宗の立場であります。法華經の何處を眺めたつて、覺つたことをその儘說かれた所はない、法華經を讀むといふと、お釋迦樣が大勢の人を救ふところの有難いことを說いて居る、菩薩も大勢集つてこれをお讚め申して居る。法華經に現はれたのは、佛の慈悲の働きが現はれて居るに過ぎない。華嚴經はさうではない、お釋迦樣が自分の智慧をスッカリ打明けられて居るから、この佛の智慧が根本だ、救ひは智慧の現はれた一方面に過ぎない。斯ういふ風に議論をするのであります。これは華嚴宗ばかりでなく、世の中の宗敎家といふものは往々にしてその議論をする。救ふといふことは末で、覺るといふことが本である。覺つたから救へるのであつて、どつちが主體かと言へば覺りが主體である、斯ういふ議論をするのであります。ところが、それは間違つた見方です。何故なら、覺つたら救はずには居られないのです。覺つて居るといふことと、救ふといふことと、二種に思ふのは間違ひであつて、智慧があつたならば一切衆生の性質が判つて、一切衆生の有樣が判るから、救ふ爲に力を盡さずには居られるものではない。智慧と慈悲と分けて考へるのがそこが間違ひである。本と末と考へるのは間違ひである。智慧があれば必ず救ふのです。又救ふといふ働きのある人は必ず智慧を具へた者であつて、智慧と慈悲とを別々に考へて、どつちが上とか下とかいふのは間違つて居る。そこが大事な所であります。吾々でもさうです、往來に子供が轉んで泣いて居る、その子供が何處の子供か判らない時には知らぬ顏をして居るが、自分の子供だと判れば急いで、抱き上げて宥めてやる。自分の子供だと判れば棄てゝ置けない。『これはどうも俺の子供らしいけれども構はない』ナンといふことの出來るものではない。ですから物が判れば、慈悲の働きといふものは必ずこれに伴ふに相違ない。智慧と慈悲と別々に考へることは間違つて居る。それだから日蓮上人はそこを終始仰しやる、お釋迦樣が世の中に出て吾吾をお救ひ下さつて居ることは、それは救はずには居られない。お釋迦樣は覺つて居らつしやる、覺つて居らつしやつたら、どうしても吾々をその儘にして置くことは出來ない、覺ると同時に救ふといふ働きが出來るのである。それを別々にする譯はないといふことを言はれて居るのであります。今こゝに華

嚴經を反駁して居られますが、如何にもその通りであります。よく世間でも『判つては居るが實行が出來ない』と言ふが、それはまだ本當に判つて居ないのです、判つたら實行せずに居られるものではない本當に腹が減つたとしたら、何か食はずに居られない。そこへ目の前に鰻飯があると判つたら、食はずに居られない。鰻飯と判つて食はずに居るといふのはまだ腹が減つたことが判らないからである。本當に腹が減つたと判つたら、目の前にある物が食物と判つたその時に食はずには居られない。知つて行はないといふのは、まだ本當に知らないのです。知つたら必ず行ふに違ひない、又行はなければ知つた甲斐がない、さういふ譯だから、智慧といふものと慈悲といふものと二段に分けて見るといふことは、それはまだ佛を本當に知らないものだといふことが議論されるので、それは尤もなことであります。兎角に物を分けるやうな考を持つて居るから、華嚴經の佛は報身で尊いが、法華經は應身でつまらないといふやうな事を言ふのです。

或は又眞言宗の方から、法華經の壽量品の佛は覺り切つたものではない。無明といふのは覺り切らないこと、邊域といふのは片隅といふやうな意味で、さういふ境界の者だ。大日經の中に說かれた大日如來は明の分位、覺り切つた境界だ、斯ういふことを言つて居る。それは法華經の壽量品の唯一絕對の佛がどういふものであるかといふことを知らないからさういふことを言つて居るので、お釋迦樣を絕對の佛の現はれたものと考へるならば、お釋迦樣以外に大日如來を絕對の佛と立てる必要は無論ないのであります。大日如來が上とか下とか議論することは要らない。絕對のもの、一つのものに、上もなければ下もないのだから、さういふことは考へられない。だから大日如來を拜んで居るといふことは、これは壽量品がよく讀めて居ないから、斯ういふことになるのである。

雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讃れば黃石も玉とみへ、諛臣も賢人かとおぼゆ。今濁世の學者等、彼等の讒義に隱されて壽量品の玉を翫ばず。又天台宗の人々もたぼらかされて、金石一同のおもひをなせる人々もあり、佛久成にましまさずば、所化の少かるべき事を辨ふべきなり。月は影を慳ざれども、水なくばうつるべからず。佛衆生を化せんとおぼせども、結緣うすければ八相を現ぜず

兎角世の中は間違つた事が多いのであつて、雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人が讃めれば黃石も玉と見え、諛臣も賢人かと思はれる。チョウドそれと同じやうに、今の學者達は斯ういふやうな華嚴宗や眞言宗の間違つた議論にかくされて、さうして壽量品といふ尊い教を、玉として尊ぶといふことをしない。又天台宗の人々でもさういふ教に迷はされて、金も石も同じだといふやうな考を持つて居る者もある。それは壽量品といふものを讀んでも讀んだことにはならない。

若し佛が久遠の遠い佛でないならば、佛の教化を受けて佛なり菩薩になつた者が、法華經の寶塔品や涌出品にあるやうに、無限にあるといふ譯はない。そこの所に氣がつかなければならない筈である。この所をよく考へないで、たゞ一二の人に說き惑はされて、壽量品の意味を本當に辨へないといふことは洵に氣の毒である。吾々は、お釋迦樣は久遠の佛がお釋迦樣となつて世の中に現はれて下さつたのだといふことの有難さを知らなければならぬ。何故なら、佛は大勢の人々を教化しようと思つても、緣が薄ければ現はれない。前に申した八相といふものを現はされないのである。吾々が特に佛に緣が多けれ

ばこそ、本佛が釋尊となつて現はれて、八相を吾々に示され、御身を以てお手本をお示し下さつた、さうして教を說かれたのである。この特別の深い緣を有難いとも思はないで、この釋迦牟尼佛をさしおいて、他のものを崇めるといふことは、本當の佛の弟子とは言へない。この緣といふものが尊いのでありまして、この緣が薄ければ八相を現せず。緣があればこそ八相を現じて、お釋迦樣はこの世の中に現はれて下さつた、この有難い緣を無駄にしてはならないのであります。

これは非常に大事な所です。勿論どの佛でも佛は尊いと言へばそれ迄ですが、緣がなければその敎は與へられないのですから、その特に有難い緣を無駄にして、その儘に淸せるといふ事があつてはならない。實に吾々は心から感謝して、さうして釋迦牟尼佛となつて現はれた本佛の尊い敎を、永遠に仰いで行くといふことにならなければならない譯であります。こゝの所は唯一つの宗としての議論ではなく、佛敎全體に亘つての議論でありますから、その積りでしつかり讀んで行かなければならぬと思ふのです。日蓮上人が一つの宗を立てる爲に言はれるのではない、佛敎の本當の精神を明かにするには、經と經とを比べてこゝ迄言はなければならぬといふことを信じて居られるのでありまして、こゝをよく捉まへて置きますと、吾々の信仰といふものは動搖しない。大事な所を捉まへないで、たゞ『有難い〳〵』でやつて居ると、別な有難いものがあると又その方に心が移ることになります。開目鈔もこの邊は特に重要な議論をして居られますので、お互にシツカリとその御精神を捉まへて行きたいと思ひます。

（第二十四講了）

支那事變と皇軍の戰略戰術

陸軍歩兵少佐　三　原　敏　男

前月發記事に申上げた皇軍戰略の一樓閣、三原少佐の本講堂に於ける特別御講演要旨である。

只今御紹介のありました三原でございます。今日は少い時間に、何とかして皆樣に精銳世界に冠たる皇軍の、戰略、戰術の眞髓を御諒解戴きまして、さうして、今度の事變で奮戰健鬪して居らるゝ將士の勞苦なり、精銳の度を一層深く認識して戴き、併せて長期戰に處する肚をきめて頂き度いと存じまして伺ひました。特に內輪の方々だけのお集りだといふことでしたので、僭越をも顧みず、少しく愚見を開陳して見たいと思ふのであります。

先づ第一に「攻擊と防禦」といふ事に就てお話を致します。今日の講話は徐州の會戰とか、或は南京の攻略といふ風には分類致しませんで「攻擊」なり「防禦」なり、或は「要塞戰」又は「陣地戰」といふやうな、戰術的の分類に從つてお話申し上げて、それに關聯して今度の事變の戰況を述べ、更に之に主として日本の古來の戰史を加味致しまして、尙殊に精神的のものを主にお話して見たいと思ひます。

先づ「攻擊と防禦」といふことは、何と申しましても準備に時間がある。從て地形を利用し、工事を築設して、即ち山や河であるとか、或はクリークとかトーチカ等を充分に利用して、有ゆる準備をなし、必要な場合は測地

と申して陣地前の地域を測量迄して居ります、即ちあそこ迄は何千何百米、この氣溫に於て、この氣濕に於て、この風速に於て、この彈丸を以てすれば必ず命中するといふ準備をして居りまして、丁度敵の通過する場所を疾風的に、徹底的に、射彈を浴せ掛けるといふくらゐの準備をして居るのであります。然るに「攻擊」といふのは、御承知の通りに寄るべき地物更になしといふやうな所を、血みどろになつは攻擊前進して行かなければなりません、所謂裸で行くのであつて敵の彈丸を防禦する何物も無いのでありますから、敵の彈丸を避けながら、どん〳〵前進して行かなければなりません。さうして前後に斃るゝ戰友の屍を踏越えながら、敵の方に近寄つて行くのでありまして、どう考へても理論上は「防禦」が宜いに定つて居ります。然るに古來の戰史を見まするに「防禦」で勝つたためしは滅多にないのであります。これは單に日本に限らず、各國の戰史を見てもさうですが、「防禦」で勝つた戰例は無いことはありませんが非常に稀であります。結局「攻擊」といふものの利益は精神的のものであつて、「防禦」といふものの利益は物質的なものであるといふ事に歸著するだらうと思ひます。それで理論上は「防禦」が宜いに定つて居つても、敵に勝つ爲には必ず攻擊をしなければならないといふ信念を以て、皇軍は戰略、戰術の根本としてゐるのであります。即ち皇軍は徹底したところの攻擊一點張の主義を採つて居ります、所謂肉彈主義、前進主義であります。

皇軍の戰術に就ての本はいろ〳〵ございますが、其の中で最も基礎になる戰鬪綱要といふ兵書には、「狀況已むを得ざる時の外は防禦してはいけない」といふことが示してあります。吾々は常々之に從つて研究をして居りましたところが、數年前に更に之を改正して「狀況眞に已むを得ざる時の外は防禦してはならない」といふやうに、「眞に」といふ字を入れられたのであります。吾々はその眞に已む得ざる時の外は防禦すべきものではないといふ信念の下に、兵力が劣勢であらうが、その狀況が不利であらうが地形が不便であらうが、唯だ攻擊一點張りである、無論そのやり方は十分考へなくてはなりませんが、攻擊で以て敵を壓倒殲滅するのであるといふ主義を以て訓練されて居るのであります。

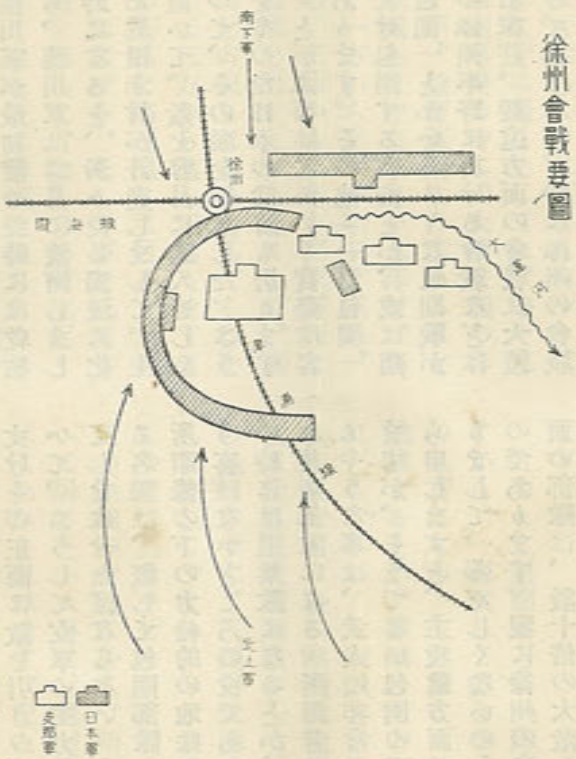
ところが、今度の事變に就てこれを考へますと、當初不擴大方針を堅持して居りました頃には、その攻擊がやり度くても出來ない、殊に上海方面に於ける陸戰隊の如き、或は蘆溝橋の戰鬪の初期に於ける我が陸軍駐屯部隊の如きは、無論攻擊といふ事が皇軍の最も賞揚する所であり、而も兵力の劣勢の時には奇襲を以て攻擊するいふことを最も得意の戰法とするに拘らず、その得意の手を封ぜられて居た譯であります。一昨日でありましたか、張鼓峰事件に就て、朝鮮軍の富永大尉がこれをラヂオで放送して居りました、お聽きの方も多分おありになつたと思ひますが、敵が約三箇師團の兵力と、約百五拾臺の戰車と、百臺ばかりの飛行機を以て猛烈に攻擊をして來る。我軍は不擴大方針を堅持するといふことになつて居りますので、何處までもこれを隱忍持久した。如何に敵が大兵を以て參りましても、戰略戰術に優れた皇軍は巧みに戰機を看破して、今逆襲をしたならば必ず敵をやつつけ得るといふ時機を二度も三度も發見して居ります。夫れでも敵の飛行機に爆擊され、戰車に攻擊されつゝヂットとしてゐました。敵は砲彈を約十萬發も使つたといふ事ですが、あの數日間にそれくらゐ猛烈な攻擊を受けながら、又最も得意の手を封ぜられ乍ら、あり餘る實力を備へ乍ら、隱忍持久をしなければならなかつたのであります。其の軍紀は實に嚴正であつたのであります。一兵に至る迄、この不擴大方針を堅持することが徹底致しまして、到頭陣地に固着して出擊をしなかつたのであります。無論、國境線を越えて入つて來た敵に對しては逆襲をやつて居りますけれども、我は國境線を一歩も出なかつたのであります。

ところが實際その戰鬪に參加した人に聞きますとモウこれくらゐ殘念な事はなかつたさうです。實に血の涙が出るやうな思ひで切齒扼腕したそうであります。それで不擴大方針といふ事ではあるけれども何とかして、敵をやつけたいと、現地で實際敵と相對して居る部隊は、思つたといふことですが、それは洵に無理もないだらうと思ひます。實際敵には射たれて居りますし、又敵の飛行機は上で生意氣にも宙返りをやつたりして居るのに、我軍の飛行機が一

臺も出動しないものでありますから、何とかやる方法はなからうかと考へましたが、上司の方針が儼然たる不擴大方針でありますから、どうしても出られない。その時に第一線の部隊長は、餘りに戰友は斃れますし、迚も不擴大方針を堅持して居るといふことは當面の隊長として忍びぬものがありましたので某將校を傳令として、その事を後の本部隊の方の部隊長に報告して意見を具申された。その將校は非常に猛烈なる敵の集中射擊の間を縫つて、やつと本部に辿り著きまして、さうして「徒に陣地に固着して敵彈に斃れるよりは、進んで敵中に突入して死にたいと、第一線隊長以下全部考へて居りますから、不擴大の方針は分つて居りますが、何とかして攻擊をお許しになる譯には行きませんでせうか」と隊長に懇願しました。ところがその本部の隊長も、實に血の涙を流すやうな悲痛な面持で「第一線部隊のその精神はよく判つて居るが、攻擊して敵の彈丸に射たれて死ぬ積りで、陣地線上の花と散つて呉れ。」と言はれたので、その將校は仕方なく第一線に歸つたとの事です。それくらゐ、所謂傳家の寶刀を拔かないで、(拔いたならば必ず效果を擧げまするが)我慢したのであります。而も、その時の防禦に於きましては、防禦の中でも最も消極的な專守防禦といふ方法を取つて、敵が來たならば逆襲するけれども、こちらから進んでは出ないといふ方法を採つたのであります。「攻擊」「防禦」といふ事に就て以上のやうな觀念で以て、今後、皇軍の戰況を新聞などでお讀みになりますと、幾分ハッキリした點が出て來はしないかと思ひます。

その次は、近頃よくいふ「包圍」とか「迂回」とかいふことであります。「包圍」とは申す迄もなく、敵を取圍んでしまふことで、それから「迂回」といふのはチョットそれに似て居りますけれども、ズッと敵の後ろに廻つて、敵の退路に迫りまして、敵をして戰はずして退かしめるといふ方法であります。丁度、「孫子」などで言ふ「途を迂にする。」ことに相當するのでありまして、この迂回をされると敵は必ず退くか、或は退くことを欲しない時には嫌々ながら戰をするかといふ事になります。

この「迂回」とか「包圍」とかいふ軍略は、古來から我が日本の名將が屢々實施して居るところであります。



徐州會戰要圖

而して、一の谷の戰なども無論義經が大迂回をやり、且全軍としては包圍をやつて居ることになります。長篠の合戰、山崎の合戰、三方ヶ原の合戰、皆さうであります。外國ではグンビンネン合戰、カンネの合戰、ドレスデンの合戰等が之であります。

これは徐州會戰を頗る簡單に描いた圖でありますが最初、徐州の東北方に居りました皇軍の部隊が我に數十倍するところの敵の大軍をば其の正面に引きつけて置きまして、さうしてその間に、南の方から矢で示したやうな方向に北進して來ましたところの北上軍と、北の方面から迫つて參りました南下軍とが、巧みに相呼應して、少しは缺けた所もありましたが、大體に於て完全に敵を包圍してしまつた斯ういふのを「完全包圍」と申します。この完全包圍は世界の戰史を見てもなか〳〵見當りませんが、日本には只今申した徐州會戰の外にもあります。上田城の戰鬪などは之であります。天正十三年の昔に信州の上田の城に於きまして、德川軍が攻擊して來ましたのを、眞田幸村父子がこれを巧みにズッと引きつけて置いて、豫めあちらこちらに伏兵をして置いて、殆ど完全に攻擊軍を包圍してしまつ

た、さうして徳川軍を壓迫して、だん〳〵包圍圈を緊縮しました。僅かに血路を開いて、其處から雪崩を打つて逃げる敵も、悉く神川といふ川に壓迫されました。而もその川は、徳川軍が最初渡つた時には乾枯びた川でありますから、徳川軍は容易に渡河しましたが、今度退却する時になると、滔々たる濁流に化して居る、これは豫め眞田幸村が計畫しまして、上流の方の堰を止めて置いて、敵を容易に進入せしめその退却する時になつて、その堰を切落した。さういふ巧妙極まる戰術をやつた日本の武將も居りますが、この「完全包圍」といふ事はなか〳〵實際は容易に出來ないやうであります。その他「一翼包圍」と言つて、敵の一方だけ包圍する戰術とか、或は兩翼を包圍する「兩翼包圍」とかいろ〳〵な包圍戰がございますが、今度の涿州平野に於ける會戰などは兩翼包圍で、保定、石家莊、綏遠方面の會戰は大體に於て一翼包圍のやうであります。特に涿州の會戰などは、敵の退路をS字狀に二重に包圍して居ります。これを「二重包圍」などゝ申します。

そこでこの包圍といふ事に關して、吾々が非常に考へなければなりませんのは、これはよく新聞紙上などにも出て居つたやうでありますが、正面部隊が非常に重要な役割を演ずることであります。出來る丈けその正面に敵を引きつけて置いて、牽制して置いて、さうして友軍の主力をして容易に敵を包圍してしまはせねばならない。それで包圍の時の蕭々たる名聲は、概して包圍部隊の方に取られてしまふ、所謂緣の下の力持的の地味な、吾々としては實は餘り喜ばないところの役であります。例へば「追擊」の時には追擊隊になるとか、或は「退却」する時には後衛部隊になる、所謂昔の殿軍の將になるとかいふやうな事は、武人の非常な名譽だと言はれて居りますが、そうでない包圍の正面部隊等は、戰術上から申しますと、主攻擊方面でないところの部隊でありまして、華々しくないのみならず、非常に苦しいのであります。現に徐州の會戰に於きましても、正面の部隊は、數十倍の大敵を引きつけて、それをいろいろ操縱して、その間に主力部隊の包圍態勢を形成せしめて居りますが、その部隊がなか〳〵難かしいのでありまして、「孫子」などによく言ふ「能にしてこれに不能を示し」といふ句に當つてゐます。所謂出來るのに出來ない風をして、即ち極端に言へば弱い風をして、敵を引きつけて置いて吾が術中に入れるといふやうな方法も採らなければならぬやうであります。殊に支那軍などに對しましては、中々之が大切であります。滿洲事變の時に、大興安嶺の作戰といふのがありますが、敵將蘇炳文の率ゐる軍を我第十四師團が捕捉殲滅してやらうといふ譯で、作戰を開始致しました。一方から蒙古の騎兵を進め、又乘馬した歩兵を進め、正面からは主力部隊が行く又一方からは自動車部隊を出すといふ風にして、蘇炳文が展子山といふ山を占領してゐるから、それを包圍してしまはうとして三方から進んで參りますと蘇炳文は何時の間にか其處を逃げ出して居る。又再び包圍しようとすると又逃げる、そんな事を三度もやりましたが、到頭敵を逸して、こちらが國境近くまで參りました時には、敵は既に露西亞領に入つてしまつたといふ風でありました。逃足の非常に早いといふのは唯だ蘇炳文のみならず、支那軍一般の特徴であります。それを包圍したり捕捉したりする爲には、先づ、こちらが弱い風をしないといけない。強い風をしますと支那軍はスグ逃げますから、それをよく考慮して、掛らなければならないのであります。

近頃よく新聞などに「殲滅戰」といふ言葉が出ますから、一言致して置きますが、この殲滅戰といふのは實はなか〳〵容易なものではありません。敵を殲滅するとか、殲滅したとかいふことをよく言ふけれども、なか〳〵殲滅といふものは成立つものではありません。彼の歐洲大戰中のタンネンベルヒの會戰は世界三大殲滅戰の一つだと言ふが、四十五萬餘の敵の中十二、三萬を死傷せしめたにすぎないのでありまして、なか〳〵本當の殲滅戰は容易に出來るものではありません。その意味から申しますと、今度の徐州の會戰に於て、殆ど二十萬の敵に死傷を與へて居るといふ事は、殲滅戰史上空前絕後のものではないかと思ひます、況んや相手が逃足の早いこと天下一品と言はれて居る支那軍でありますから、それを皇軍が捉へたのでありますから、餘程巧妙な作戰であると言へるのであります。この殲滅戰といふのは

一面から言へば敵が強くなくては成立たない。敵が強いからこそ何時までも頑張つて居る、だから包圍することも出來る。反對に敵が弱くては、大概包圍の手を伸ばすとスグ逃出します、つまり網を張つても張らない前に逃げてしまふから、この殲滅戰は非常に難かしいといふことになる。さういふ意味に於きましてあの徐州會戰で、正面部隊が非常なる辛苦をして居られるといふことに、吾々は深甚の敬意を表さなくてはならぬのであります。

兎に角、現在は殆ど包圍萬能時代でありまして、何とかして包圍が成立つやうに考へて居るのでありますが、これは外國人に倣ふ迄もなく、日本古來の名將が數へ切れない程、澤山に實施して居ります。

前述しました樣に倶利加羅峠の會戰の如きも其主なるものでありませうが、壽永二年木曾義仲が四萬の軍を以て七萬の平家の軍を山中に夜襲した戰であります。あの時には、四方面から前進をしまして、四天王の一人たる樋口部隊の如きは迂回して敵の眞後に出で居る。それから巴御前の如きは第三縱隊に長として、手兵約一千を提

南苑攻略圖

日本軍
支那軍

げて、楚々たる女性の身を以て、先頭に馬を進めて居ります、あの壯烈なり倶利加羅會戰の夜襲戰に於きましては、極端なる迂回と包圍を併用してやつて居ります。勿論、此の種の戰例は外國にも相當ありますが、公平に見て確に我々の祖先がやられた迂回包圍の方が、彼等のやつた事に遙かに優れてゐることにつく〳〵感ずるのであります。

今一つ、今度の事變で完全包圍の例を思出しましたから申上げます。

之は北京の直ぐ南方の南苑攻略の圖でありまして、その時日本の萱島部隊とか、川岸部隊とかいふやうな部隊が、美事に四方面から進みまして敵を包圍し、その包圍圈を緊縮致しまして、敵を袋の中の鼠にしてしまつたのであります。

桶狹間會戰要圖

今川義元
今川軍
織田軍

これは桶狹間の會戰の簡單な圖であります。是れ亦迂回の一例でありまして、清州の方面から參りました織田信長は一部の兵力を以て敵の第一線に當らしめ之を牽制し、主力を以て線を引いたやうな方向に山の中を迂回前進して、ズッと敵の背後に迫りまして、さうして敵の司令部を襲うて、御承知のやうな大捷を得て居ります。この時の兵力は今川軍が二萬五千人、織田軍の兵力は三千、殆ど十倍の敵に向つて決然として攻勢を取つて居るといふことになります。

是亦頗る簡單な圖でありますが、一の谷會戰の圖であります。東の方、生田森では源範頼の指揮する五萬騎、それから平知盛の指揮する五萬騎が對峙して居ります。梶原源太景季熊の梅の故事があるのは此處の戰であります。それから北の方には、能登守教經や越中前司盛俊とかいふ平家の大將が各々一萬人を引連れて、現在で言へば重疊配備をしてゐる、即ち前後に重つて二線陣地を拵へて居る、それから鐵拐山の方には平家の總豫備隊が居る。西の方には、有名な歌人、忠度が陣地を守つてゐる。それに對して義經は、京都の方から參りまして、土肥實平に七千騎を指揮せしめて西門（忠度の方）に向はせ、自ら三千騎を引連れて蛙岩の方面から鵯越街道に出る積りであつたと見えまして、こゝに參りましたが、そこには敵が重疊配備して居るから、こんな所へ出ても駄目だと考へた。

一方、平家の本營たる一の谷方面を見ると、敵は警戒をしてゐない。寧ろこの一の谷の方に早く迂回して、敵の虚に乘じた方がよいと思つた、これが戰術でいふ「奇襲」であります。之は皇軍の最も得意とする戰術であります。この奇襲の要訣は何かと申しますと、敵の不意に乘ぜよといふことであります。これは「孫子」にもそれと少しも變らぬ言葉があります、それは「其の趨かざる所に出で其の意はざる所に趨く」といふことであります。その奇襲が

一の谷會戰要圖

非常に我軍の得意とするところでありまして、この一の谷の戰の時も、義經が遺憾なくこの奇襲を實行しました。その攻めた場所は、絶壁であつて、而も

長篠の會戰要圖

總豫備隊の眞後です、敵は誰も此處を攻められやうとは考へてゐない。さうして又その時機は如何なる時かといふと、彼我兩軍の決戰の眞最中であります東の方でも大激戰の酣なる時であり、西の方も熊谷直實が平山季重と先陣を爭つたり何かして決戰の最中であり、東西兩方面共に大激戰が頂點に達してゐる。總豫備隊の如きも東の方へ行つて空つぽになつて居るといふやうな、最も好い時機に乘じた。これが所謂奇襲の最も大事な要訣であります。

それからこの圖は、織田信長が天正三年長篠に於て會戰をしたところの圖で、これは武田勝頼の軍に對しまして防禦をして居ります。この長篠城を守つたのは、奥平貞昌といふ德川家康の家來で文武兩道に秀でた僅かに二十四歳の武將ですが、僅かに五百人で約三十倍の大敵を數箇月に亘つて防禦して居ります、これは後で「要塞戰」のところでモウ一度申上げます。この城を守るといふ、所謂「守城戰」「要塞の防禦」といふことの根本原則は、一時間でも一分間でも永く敵を引きつけて置くといふ事であります。反對に攻める方は、一分間でも一時間でも早く敵の城を奪ふ、要するに時刻の問題であります。守城戰は何と申しましても多勢に無勢であり、何れは

敵に奪はれるものであります。外國などの守城戰の戰史を見ましても、皆適當な時期を見て退く、或は降伏して開城をしてゐる。旅順然り、青島然りであります。日本はまだ殘念ながら要塞を守つた經驗を持つて居りませんけれども、昔の守城戰を以て見ますと、所謂城を枕に討死をしたといふやうに、最後まで、非常に頑張つて戰つて居る。長篠會戰の際も奥平貞昌の如きは約三十倍の大敵に對して數箇月も持ち堪へて而もとう〳〵屈伏しなかつた。有名な鳥居强右衛門などの故事はこの時の事であります。この時の織田信長の防禦は非常に珍しい戰法であります、豫備隊といふのは一般に第一線の後方に居るのが原則でありますが、信長はその豫備隊を前の方に出しまして、兩方から蟹のやうな態勢を作つてさうして敵が猪突猛進するのに對しました。敵將勝頼の斯ういふ性質を信長は十分に看破して居たのであります。果して、豫想通り勝頼の軍がやつて參りますのに對し、信長はあれだけ豪放濶達な人でありましたけれども、細心緻密に、水も漏さぬ周到なる準備をして待つて居ります。即ち連子川を利用し、行軍の途中から各人に一本づつの棒切と、繩とを必ず持つて行かせた。その方面は繩も木も無い所だからといふので、こういふ準備をして今で言ふ鐵繩網のやうなものを作らせたり、その他いろ〳〵細かな事にまで頭を使つて居ります、さうして敵を正面で食ひ止めて置いて兩翼から包圍をやつて居る、而も尙ほ其の豫備隊中の一部隊を遠く迂回させました。酒井忠次がその迂回の隊長でありました。この時の面白い話があります。當時武田信玄は既に亡くなつたとも言ひ、然らずとも言ひ、兎に角生死は不明であつて、當時甲州軍といふのは天下第一の精兵と言はれまして、流石の織田、徳川の聯合軍も非常な脅威を感じて居りました。所謂恐武田病と申しますか武田軍を恐るゝ病氣が蔓延して來てしまつて居る。その時に徳川麾下の大豪傑の酒井忠次が恐る〳〵信長の前に出て參りまして、「全軍大變意氣が消沈して居るやうであるが、士氣が衰へて居ては戰が出來ませんから、何とか士氣を旺んにし度いものであります。」と言つて海老掬といふ踊が當時あつたさうですが、その海老掬を自ら陣中で踊りましたので、それ

が爲に信長はじめ一同が捧腹絶倒致しまして、恐武田病などは何處かへ吹飛んでしまつて、それから全軍が大いに元氣を出したさうでありますが、その酒井忠次がその調子に乘つたといふ譯でもありますまいが、直ぐ又、信長の前に出まして、「實は私が非常な名案を考へました。今から私がこの南方の山を通つて敵の背後に向つて大迂回したいと思ふから、どうか許可を願ひたい。」と言つた、その南方は大變山の多い所です。それで信長に褒められる積りで居つたところが、信長は豫想外にも之を大喝致しまして「田舍者の小策、取るに足らぬ。」と言うて、衆の面前で非常に酒井忠次を叱つた。そこで忠次は先刻までは非常に元氣が良かつたのでありますが、叱られたのでスゴ〳〵と部隊本部を下りました。ところが其夜中になつてから「信長公がお召である。」との事何事かと思つて參りますと、「汝が先刻申した事は非常な名案である、是非やつて貰ひたい、實にうまい事を考へて呉れた、先刻實は直ぐ許したかつたのであるが、その企圖を敵に暴露してはいかぬ、敵を欺くには先づ味方からといふ言葉もあるから、衆の面前でわざと叱つて取上げなかつたのである、早速行つて呉れ」と言はれた。そこで早速大雨の降る眞暗い夜半に、非常に嶮岨な山中を敵の背後に迫ることになつた。出發の際信長が自ら忠次の馬の轡を取つてやつたりなどして志氣を鼓舞して居ります。この迂回部隊は次第に前進して、美事敵の背後に迫つて居ります、これなどは迂回の非常に好い例だらうと思ひます。

大體包圍とか迂回とか奇襲とかいふ話はこれで濟ませまして、次に「夜間攻擊」の話に移りたいと思ひます。この夜間の攻擊は又「夜襲」と申して居りますが、この夜襲も日本軍の非常に得意とする戰法でありまして、日本軍の夜間攻擊と言つたら、外國軍が慄え上る程であります。先刻も申上げました俱利加羅峠の會戰などは其の一例であります。又鎭西八郎爲朝の如きは、十三歲の時から戰を始めまして大小七十回餘の戰をやつて居るのでありますが、勝つたのは悉く夜戰ばかりでありました。昔は夜討、朝駈（今の拂曉攻擊の意）など、稱して居りました又菊地武光公が、唯だ一人九州の一角に卓立して、

勤王の旗を鮮して、懐良親王を奉じて筑後河畔や寶滿河畔に少武頼尚の大軍をやつつけた事があります、その戦闘にも夜戦を併用して居られます。この夜戦を外國人はどうも餘り喜ばない風があります。アレキサンダー大王がゴウガメラといふ所でペルシャ軍を攻撃致しました時にも、部下が皆夜戦を勧め、「敵の増援隊が明日來るのでありますから、今夜の内に夜襲したら必ず勝てます」と意見を具申したが、アレキサンダー大王はこれを嚴然として肯かない、「夜戦洵に結構である、勝利は必ず得られるであらう、併しながら自分は勝利を偷むことを欲しない、正々堂々、烈々たる白日の下に於て彼をやつつけるのだ、さうしないと彼は、夜戦なるが故に敗けたのだ、白晝に於て戦をしたならば、必ずアレキサンダーの如きには敗けない。といふ氣持を抱いて、再び我に戦を挑むだらう、さうしたら戦は結局何時までも續く、それよりも根本的に大鉞を揮つて、堂堂たる白晝戦をやるべきだ。」といふのであります。これは夜戦を貶した意味ではありませんが、さういふ風な思想が更角外國軍にはあるやうであります。

今度の事變に於きましても、到る處で夜戦を敢行して居ります、これは精鋭な軍隊でないと出來ません、皆さんの中には無論軍隊生活の經驗のおありになる方もありませうが、夜戦では白晝と違つて、部隊の團結とか、指揮の具合とかいふ事がまるで違つて來ます、それが巧く參ります爲には、何と申しましても軍隊の訓練が大切でありまして、夜襲に優れた軍隊は、つまりその非常に精鋭な事を證明するやうなものであります。それで、この夜襲は皇軍に於きましては、大いに奬勵して居るのであります。富士の裾野などに軍隊がよく野營に參りますが、以前は、二週間位行つて居る中で四度か五度ぐらゐ夜間演習をやつて居りましたが、その後になりましてからは、殆ど夜間演習をやりに野營に行つて居るやうなものになりました。その成果が無論今度の事變に現れまして、到る處に赫々たる夜襲戦の成果を擧げて居ります。殊に張北から張家口にある長城線では二晩も續けて連續の夜襲をやつたりして居るやうであります。この夜襲戦の要訣としては、團結を確り保ちまして、不意に敵に肉迫して、白兵を揮ふて一

舉に殲滅する、これが原則になつて居ります。この夜襲戦をどうも外國人は餘り喜ばないやうです。皇軍には、日露戦爭に於ける三塊石山の夜襲、或は弓張嶺の夜襲といふやうな世界戦史上、夜襲の華と謳れて居る戦例があります。大都會から參つた壯丁と田舍で暮して居つた壯丁とは、夜の具合が非常に違ひます、明るい所で育つて居る人はどうも夜の視力が弱い、無論慣れゝばだん〳〵宜しい。それでありますから青年學校等の訓練等でも多少さういふ事を加味してやつたら宜しくはないかと思ひます。

それから「追撃」といふことがあります。追撃と申しますのは、敵を戦場でやつつけようと思つてやつたが、敵が遁げるのでそれを追駈けるといふことでありますが、實はこれは考へて見ますと滑稽な話であつて、攻撃といふのは元來が敵を戦場でやつつけてしまふべきものであつて、敵が遁げるから追ふといふのは、攻撃が巧く行かなかつた證據であります。だから追撃といふのは、一面からいへば攻撃の拙かつたことを現はすとも言へる譯であります。ところが實際に於ては、理想としては敵を攻撃して捕捉殲滅すべきでありますけれども、なか〳〵出來ない、先刻の蘇炳文の話ではありませんけれども、殊に逃足の早い支那人は、どん〳〵遁げてしまひますから、攻撃ばかりでなく追撃によつて、それを成べく早く捉へてしまはなくてはならぬ。兎に角追撃といふのは早く敵を捉へるのが原則で、「退却」といふのは早く敵から離れるといふことが原則となつて居ります、何れもそれが根本になつて總ての處置が生れ出るのでありますが、その追撃戦で有名な戦例と言はれて居りますのは、ナポレオンのイエナ追撃であります、これは二十日間で約三百五十粁から五百五十粁に亘つて居りまして、從來、世界第一の追撃戦の好範例となつて居りますが、皇軍の行ひました、あの熱河の作戦とか、或は今度の事變の追撃戦とかは、このイエナ追撃に決して負けて居りません、その一例を申しますと、或る部隊の如きは泥濘膝を沒する地域を敵の抵抗を排しつゝ、十日間に二百八十粁、それから五日間に二百粁といふやうな記錄を幾つも出して居ります。要するにイエナの追撃は皇軍に依つて記錄を破られたと言つても宜いと思ひま

す。又先刻申しました一の谷の會戰の時なども、義經は二月六日の未明に京都を出て居りますから、朝早くから夜遲く迄に一日十八里の山地强行軍を致しまして、それから三里の夜行軍をした上に、敵陣地を夜襲して、更に十里の追擊をやつて居ります。あの重い甲冑を着て、あの山中の雪の降り積もつて居る中をそれだけの活動をして居りますから、さういふ例から考へましても、日本軍の追擊能力といふものは非常に偉大なものであります。

ところでこの追擊といふことは、實に難かしいところがあります、それは何故かと言ふと、元來、敵陣地を占據するといふ事が非常なる難事業であります、その難事を不眠不休、血みどろになつて遂行してホッと一息つくのは人情であるからである。所がそれを一息つかしてはいかぬのであつて、直ぐ間髪を入れず追擊をしなければならぬ。何故か。プロシヤの名將ブリュッヘルは『追擊は再戰の勞を省く』と言つて居ります、これは所謂戰術だけでなくて、處世上の總てに應用が出來るだらうと思ひますが、或事をやりますのに徹底的にやらないで、蛇の生殺程度にやつて置くから、更に再び同じ事をやらなければならない。病氣をしても完全に癒すに至らないで八分か九分のところで止めて置くから、更に費用を掛け、時間を掛けて病氣の恢復を圖らなければならぬ。だから戰爭の時も、攻擊をして敵陣を占據しても直ぐ續いて追擊戰をやつて行かなくてはならぬ。でありますから、この追擊戰に當つては、平素は慈父のやうに、部下と苦樂を共にし、部下を非常に勞ふ隊長も、心を鬼にして叱咤激勵しなければならぬのであります。古來、凡將は皆この追擊をどうも躊躇するやうであります。否、名將にも此の事が少くないやうです。戰には勝つた、勝つたが追擊はしない。何故しないかと言ふと部下に氣の毒でやれない今までにあれだけの苦心をして此所を占領した部下を、更に後から襲打つて進んで行けといふことは氣の毒でやれない、併し大局から觀ますると、部下を叱咤して追擊することが却つて、部下を助ける途であります。そこで皇軍の戰術の原則を書きました本に「總て追擊に方つては、極めて鞏固なる意思を以て之を斷行せよ」といふ意味を言つてあります、『極めて鞏固なる意思を以て』といふことであります、皇軍の戰術の本は、非常に形容詞の少ない本でありまして、『極めて』とか、『大いに』とか、『非常に』とかいふやうな形容詞は殆ど使つてありません、併したゞ追擊の所だけには「極めて」といふ字を使つてあります。それだけ追擊といふものは難かしいものであり、又猛烈に之を敢行する必要がそこにあるのであります。

それから「陣地戰」といふのがありますが、この陣地戰といふのは歐洲大戰で申しますと、マルヌ河畔の會戰がありましてから、だん〳〵と兩軍の陣地が膠著致しまして、スイスからズッと北の方北海に至る數百粁の線となりました。さうして爾後の四年間は戰線に大した變化がなく、局部的に戰鬪を續けたのであります。その陣地戰は今度の事變で言へば上海附近の戰鬪が之に相當します。あれだけの敵の堅陣を皇軍が不擴大方針からだん〳〵擴がつたやうな最も歩の惡い戰をやりながら、會戰後八十日間に上海を中心とする半徑五十粁の半圓形の地域を占領したといふのは、これは相手が支那だからと言へばそれ迄でありますけれども、世界戰史の何處を捜しても見當らぬ陣地戰攻擊の華であります。

上海附近の陣地戰に於ては、トーチカの攻擊法、地中戰（坑道戰）、市街戰、クリークの渡河戰等申上度い事が多々ありますが、時間の關係上此れで止めて置きます。

次は「要塞戰」でありますが、この要塞戰を今度の事變に當嵌めて考へますと南京の攻略でせう。南京は御承知のやうに民國二十四年以來、蔣介石が五千萬元の金を投じて、最新式に設備しました大きな要塞であります。要塞には本防禦線といふものがあります、要塞の一番外側にある何堡壘々々々といふやうに堡壘、例へば旅順で申しますならば、松樹山堡壘とか、東鷄冠山北堡壘とかをズッと列ねた線を本防禦線と言ひます。南京の攻擊では、その本防禦線の攻擊から開城まで、而もその中に猶豫期間を入れまして、七日しか掛つて居りません。而も敵軍の兵力は、攻城軍たる皇軍より却つて多かつたのであります。これを世界各國の要塞攻略戰史に比べて見まして、殆ど比較にならない程の早い速度であり

ます。（旅順もヴェルダンも其の攻略に半年かゝつてゐます。）

次は「上陸戰鬪」で、所謂「敵前上陸」であります。今度の事變では、吳淞方面の敵前上陸、或は有名な『日軍百萬上陸』の柳川兵團の杭州灣北岸上陸、或は揚子江岸白茆口の上陸とかいろ〳〵ありますが、要するに、その根本原則は船舶の機動力を利用し、敵の不意に乘じて上陸することに在るのであります。

これは大楠公の參加されました湊川の會戰の圖であります。斜線で描いたのが新田義貞の軍と大楠公の軍であつて、海岸方面と山の手方面との守備をやつて居られた。足利軍は三縱隊になつて前進をし、主力たる水軍は尊氏自ら指揮して、何百艘といふ船に乘つて、二船團に分れて九州の方から參つて居ります。さうして先遣隊が最初湊川河口方面へ上陸するやうに見せかけましたので、南の方に居りました守備隊が、これは大變だといふので北の方へ移つた、それで南の方面が全くガラ空きになつた時に、尊氏は主力を提げて悠々と無人の境を行く如く樂々と上陸した。柳川兵團の奇襲的上陸と同じく敵の虛に乘じたやり方をやつて居ります。即ち上海方面に於ては非常な激戰をやつてゐる、而も最初は吳淞方面から非常な損害を拂ひつゝ、殆ど敵の正面に上陸をして

湊川會戰要圖

居つたり何かして、上海方面に敵の注意を十分に牽制して置いて、杭州灣方面から不意に上陸した事と、少しも原則に變りがないだらうと思ひます。

大楠公の話が出ましたから一言申上げますが、大楠公は有名な法華經の行者であらせられまして、丁度大楠公の五代目の御祖先に盛康といふ方が居られて、その人が非常な法華經の信者であつた。さうして尙ほ水分明神といふ氏神樣を非常に尊崇して居られました。ところがその盛康公の夫人が成氏といふ二歲の男の子を遺されて、何處かへ見えなくなつてしまつた。それで跡へ「神武統宗」といふ希代の一卷が遺されてあつたり、いろ〳〵な點から考へまして、これは水分明神の御化身であつた、自分が平素法華經を非常に信仰するものであるから、明神樣が女の姿に變つて自分に嫁いで來られて、さうして立派な子供を授け、且この秘卷を與えてお歸りになつたのだといふことになつて居るのであります。それから更にその翌年二月の中旬なりました、或日盛康公が館の前にありました楠の木の根本を何かの用事で下僕に堀らせましたところが、地下三尺の處に觀世音菩薩普門品の一卷が埋まつてゐた。それは昨年の五月何處かへ行かれた人が自分でお書き寫し奉つたところのものであつた。これは大變有難いといふので、神武統宗とその普門品とが楠家の家寶になりまして代々傳つた。その普門品は大楠公もこれを身に附けられまして戰場に出て居られます。赤坂の戰の時には、五百人で以て三十萬の賊軍を惱まされましたが、到頭衆寡敵せずして、其處を退いて金剛山に行かれる時に、スグ傍から臂を射たれましたが何ともない。よく見ると、丁度懷にされてゐた家寶の普門品の一卷に矢がさゝつて、御自分は何ともなかつたわけだつたのです。それから一層熱烈に信仰の度を深められたといふ話があります。大楠公が非常に信仰の厚い方であつたことは私が申す迄のこともありませんが、兵法、軍略といふ方面から申しましても、大楠公は、信仰に移られましてから「爾來、兵を用ひるに一段の神妙を加ふ」といふやうなことを云うて居られるのであります。御參考までに申上げて置きます。

又「敵前渡河（渡河作戰）」といふことがありますが、

大體に於て根本原則は上陸作戰と同樣です。今度の事變で大冊河、拒馬河、永定河、大黃河等の渡河に於て皇軍はよく、この原則を巧妙に應用して居ります。

その他「山地戰」とか「中央突破」とかマダいろいろ作戰がありますけれども、時間の關係上、それ等は省きまして、次は「ゲリラ戰術」に就て申上げます、之は一名「遊擊戰」とも申しますが、又「對匪戰法」などとも申します。「ゲリラ」とは西班牙から出て來た言葉であります。蔣介石が小部隊を以て皇軍の後方各所を攪亂して居るのが之である。これは現在のやうに百二十萬平方粁の廣大な土地を占領し、三千哩の鐵道を占領して居ります皇軍の後方の大地域から考へまして、決して輕視してはならぬものであります。「ゲリラ戰術」に對抗する皇軍獨特の戰法はいろ〳〵ありますが、要するに「孫子」に所謂「戰は正を以て合ひ奇を以て勝つ」といふ、その『奇を以て勝つ』といふ方法であります。即ち、一地點に兵を集結して置いて、鐵道を利用してあちらを攻め、續いてこちらを叩いたりするといふ方法等も其の一つであります。

それから「殲滅戰」といふ事がありますが、先刻もチョット申しましたやうに、殲滅といふのは、攻擊であるとか、防禦であるとか、包圍であるとか、迂回であるとか、中央突破であるとか、山地戰とか渡河戰とか上陸作戰とか等、所謂戰術の各種の原則の妙諦を綜合發揮して、最も巧妙適切にやらないと出來ないのであります、殲滅戰は戰略、戰術の總てを綜合研究して初めて解りもすれば實施することも出來るものでありまして、決して簡單に考ふべきものではありません。

殊に殲滅戰を成立たせる上に、一つの面白い原則がありますから、一寸御話し致しませう。軍でよく「各個擊破」といふことを申します、この各個擊破といふのは、敵を片端から片附けて行く方法がありまして、各方面にある敵の中で、どれが一番大事なものであるか見極めて置いて、それに向つて凡ての戰力を徹底的に集中する、その間に他の方は何とかして操縱して置く、さうして一番大事な方面で勝利を得たならば、反轉して他の方を打つ、更に鉾を轉じて他を打つといふ風に小さい兵力を巧妙に使用して

局部々々に優勢を占めるのであります。

タンネンベルヒの會戰は、殲滅戰の最も好範例とされて居りますが（皇軍で之以上の殲滅戰をやつてゐますが、分り易いから之について先づ述べます。）これは有名なヒンデンブルグ大將が、獨逸第八軍の軍司令官になりまして十四萬の兵を以て、東普で露のザンソノフ軍とレネンカンプ軍と合せて四十五萬の大軍をやつつけた會戰であります。それでこのマゾールといふ湖沼地帶に若干の騎兵師等を殘しまして、あとの主力は鐵道を利

タンネンベルヒ會戰要圖

用してタンネンベルヒ方面に南進し、敵のザンソノフ軍を三方面から包圍して、殲滅してしまひました。それから又廻れ右をして今度はマゾール湖沼地帶方面に來たレンネンカンプ軍を叩いた。ザンソノフ大將は到頭敗戰の責を負うて自殺してしまひました。このザンソノフ大將とレンネンカンプ大將とは平素から仲が惡かつたさうで、お互に友軍の急を見ても一向策應しないで、知らぬ顏をして居つたのであります。さういふ風に、獨逸軍が殆ど三倍の敵軍を殲滅し得たといふのは、所謂各個擊破のやり方が巧妙であつたからであります。先刻申上げて置きました徐州會戰で、蔣介石として

は、當に此の方法を採るべきではなかつたかと思ひます。即ち、先づ我が南下軍に對して大黄河等の障碍を利用して之を抑へて置きまして、その間に、主力を提げて我が北上軍を叩く、それをやつて置いて今度は南下軍に當るといふやうな方法であります。皇軍が假りに彼の位置に在つたならば、この方法をやつて居るのではないかと思ひますが、彼はさういふ擧に出でませんで、たゞ逡巡し蠢動したに過ぎない、而も我が正面部隊に操られて、さうして戰勝を錯覺して、日本軍與し易しと思つて居る内に、知らず識らず大包圍圏内に陷り、氣が附いた時には既に袋の中に入つて居つたのであります。之などは、この各個擊破の戰法を解しない一つの例ではないかと思ひます。

考へまするに、世間の事亦、戰略戰術と其の理を同じうすることが尠くはないのであります。只今申上げました各個擊破であるとか、敵情を十分偵察することとか、計畫を周密にすることとか、さういふ事を世間の一般の事にも應用したら非常に效果があり はしないかと思ひます。私の知つてゐる幹部候補生出身の人で相當な事業をやつて居る方が、戰術戰略の原則を世間の事に應用しますと非常に面白いものであると言つて居りますが、たしかにさうだらうと思ひます。併し徒に戰略戰術的の機略を弄して、唯だ對手に勝ちさへすればよいでは勿論いけないのであります。即ち、恩を感じ、情も知り、血もあり涙もあるといふことを忘れてはならぬと存じます。さういふ意味で明敏なる皆様方が、之等の事を幾らかでも處世上の事に應用されましたならば、或は一層效果の上る點がありはしないか、とも考へるのであります。

隨分いろ〳〵な事を申上げましたが、餘り時間もないので戰略戰術の話はこれくらゐで止めさせて戴き、最後に「長期戰」に就て一言述べさせて戴きます。これは私などが縷々申す迄もなく、皆様が夙に御研究になつて居るところでありませうが、動もすれば漢口が陷落したら時局も一段落附くのではないかといふやうな說をなす人がないでもないやうでありますから、一言意見を開陳して見度いと思ふのであります。

「漢口が陷落したら愈々戰爭が始まるのだ。」と私は思ひます、長期持久の大戰爭の幕は漢口の攻略を俟つて切つて落されるのであります。成程今まで數次の會戰に於て、日本軍は毎に美事に勝つて居ります。ところが歐洲大戰で獨逸が敗れましたのは何に基きますか、先刻申しましたタンネンベルヒの會戰といひ、或はヘルマンスタットの會戰といひ、幾多の會戰に於て毎に赫々たる快勝を博し乍ら、戰爭に於て獨逸は遂に敗けて居るのであります。何故でありませうか、長期戰を叫び消耗戰を策する蔣介石の狙ひ所は實にここに在るのであります。「日本は恰も獨逸の如く會戰には勝つだらう、而して長期戰に於ては必ず敗けるのである」といふのが彼の眞意であります。さうしていろ〳〵の事をやつて居るのでありますから、その點を諒解しなければいけないと思ひます。今まで申上げました事に依つて一通りお解りになつたと思ひますが、皇軍は世界に獨得の長所を澤山持つて居りまして、其の精鋭は眞に世界に冠たるものであります、だから今後如何なる事が出來ましても、必ず武力戰に於ては勝つのであります。たとへ對數箇國連合の作戰に於ても斷じて負けないのであります。然し乍ら、所謂國家總力戰から武力戰を引いたものに於て果してどうであるか、第一に經濟戰は如何かと申しますと、世界大戰の統計から申ますと、參戰各國は平均して國富の約四割六分を戰費として支出してゐます。今日本全體の富を約千二百億圓と見まして、五百五十二億圓だけは戰爭に使へることになる、その五百五十二億圓を四年間に使ふと見まして、一年間に百三十八億圓ぐらゐの戰費は出せるのであります。

又、之を國民の所得から考へて見ますと歐洲大戰に於ける各國の平均支出戰費が、所得額の八割九分になつてるやうでありますから、日本の一年間の國民所得を百四十億圓と見まして、毎年百二十四億圓は戰費に使へることになります。兎に角いろ〳〵な點から考へまして、四年半か五年ぐらゐは戰爭が出來るのであります。殊に外國に比し食糧の自給自足といふ强味があります。

そこで武力戰は宜しい、經濟戰も四、五年間は先づ大丈夫である。殘すところは宣傳戰、外交戰其

の他特に思想戰であります。さういふ事はどうか、之等に關しましてこそ吾々が相當覺悟して置きませんと大變な事になります、先に武力戰に就て申上ました時に、忘れた事がありますから附け加へてをきます。關係各國の軍備を見ますると、露西亞の如きは、御承知のやうに滿ソ國境方面に於て〇〇萬の軍隊と、機械化兵團が〇〇旅團、飛行機〇〇臺、タンク〇〇臺を持つて居ります。英吉利の如きはシンガポールの防備を堅くし、百二十五億屯の燃料を準備し又、二百五十億五年計畫の大軍備擴張を企圖して居る　亞米利加の如きも昭和十五年末までに飛行機五千八百臺を整備せんと計畫して居る、それから空軍根據地を、北はアラスカ、アリユーシャンの方面から、東はハワイからミッドウエー、ウエーク、それから南はフイリッピン、グアムといふ方面に設けて完全に日本を包圍して居る、さういふ國々に對することを考へると、武力戰も相當の困難は伴ふのであることを一寸附加して置きます。

次は思想戰であります。どうも日本人の性格を考へますと、長き事に倦むやうである。「孫子」も速戰速決を以て戰爭指導の大原則として居ります。

又「兵は拙速を聞く、未だ巧遲の巧なるを睹ざるなり。」といふやうな文句もありますが、何れにしても戰爭は早く片附けるのが上乘であります。殊に日本人の性格から考へると早く片付けるのを希望するのでありますが、事已に斯うなつた以上は長期戰亦敢て辭するところに非ずといふ肚を以てやらないといけないのであります。殊に敵が武力を以て正々堂堂と戰ひ來るのはまだ始末が好い譯でありますが、眼に見えないところの力を以て、長きに亘つてぢわりぢわりとやられることに就て、吾々としては確り考へて置きませんと、さういふ事は日本人としては不得手なところでありますから、相當苦しい場面が出て來るのであります。吾々は、眼に見えない敵と、長い間に亘つて戰爭しなければなりません。

第一線の將兵の爲、銃後に在つて最良の支援者として彼等をして毫も後顧の憂なからしむると同時に自ら、老幼婦女悉くが總力戰の戰士たるを自覺し、この未曾有の長期戰に最後の勝利を獲なければならぬのであります。

それから宣傳戰といふやうな事に就ても、餘程考へなくてはなりません、今日は丁度震災記念日でありますから思ひ出しましたが、大震災の時私は或る聯隊に勤務して居りまして、殆ど某縣一帶の警備を殘留の一個大隊でやつて居りました。所が、附近の町村の立派な人々が毎日のやうに來られて、「只今、不逞鮮人と青年團と格鬪して居る、實際やつて居りますから、早く軍隊を出して下さい」とのお話しであります。此方も初めは正直に考へて、そこへ行つて見ますと何事もない。それから後は話があつても上等兵一人に兵二、三人をつけてやつて見た。それでも何事もありません、終ひには何といつて來ても忙しいので放つて置くやうになつた。實際の話しであります。あの時は無論特別でありませうけれども皆非常に昂奮して、流言蜚語に迷はされて居りました、之は日本人としてお互に戒しむべき點でありませう。今後もいろ〳〵な魔の手が、國民の間に入つて來るのであります。吾々は十分心掛けて置きましてさういふ手に乘らないやうにしなければならぬのであります。

餘りお話したい事が多かつたので、急ぎ過ぎてお解りにならなかつた事が多々お有りになつた事と思ひますが、要するに、世界に最も勝れた皇軍の戰略戰術の眞髓の一端を支那事變に關聯して極めて簡單にお話致しまして、それに主として日本古來の名將の用兵をも加味したのであります。尙、更に長期戰に就きまして、特に思想戰に關し深甚の考慮を要することを述べたつもりであります。

最後に「必勝の信念」といふ事に就て申上ます。「必ず勝つと信ずるものは必ず勝つ。」とは大奈翁の言であります。吾々が眞に此の必勝の信念を把持し彌榮え行く日本國民たるを熾烈に自覺したならば、必ず長期戰の艱難を克服し、遂には聖戰の目的を達し得ることを確信するものであります。

この「必勝の信念」といふ事は非常に大事でありまして、軍に於ても極めて强い意味で常にこれを鼓吹して居ります。歐洲大戰に於きまして獨逸軍が五十萬の死傷を生じて、半年の猛攻を續けて、而もヴエルダン要塞を陷れ得なかつたのは、守將たる佛のペタン將軍の『獨兵通過すべからず』といふ一大信

念の爲でありました。佛軍は此の信念の爲、終にヴエルダン要塞を獨軍をして一指をも染めさせなかつたのである。矢張り一種の必勝の信念でありませう。又戰史を見ましても、我軍が非常な苦しみをしまして、モウ迚もいかぬ、退却しなければ殲滅されるだらうと思つて居る内に敵の方が退いた、こちらが戰に勝つてゐたのだ。敵もこちらが考へて居つた以上に苦んで居たのだ、といふことはよく見受けます。それを自分ばかりが苦んで居ると思つて、早く手を引くと敗けるのであります。之から考へましても、我々は自分が苦しい時には敵も亦それ以上の苦境に在るといふことを決て忘れてはなりません。この必勝の信念を國民の誰でもが、確り持ちまして焦らず騷がず長期戰に善處對應して行くことが必要であります。

かくてこそ、八紘一宇の大精神に基つく正義の聖戰は、如何なる磐根錯節をも一蹴して必ずその目的を達成し得るものであることを確信するのであります。

長い間御清聽下さいまして有難うございました。

> 帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに佗方の賊來りて其の國を侵逼し、自界叛逆して其の地を掠領せば、豈に驚かざらんや、豈に騷がざらんや。國を失ひ家を滅しては、何れの處にか世を遁れん。汝須く一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を禱るべきものか。就中人の世に在る、各後生を恐る。是を以て或は邪教を信じ、或は謗法を貴ぶ。　――立正安國論――

日蓮宗概觀（完結）

故　梶木顯正

第六章　得益

一　得益の種類

得益とは通途世間では『御利益』と言つてゐるが之れには色々種類が有る。先づ二ッ、その一ッは顯益と云つて眼に見へる御利益、例へば病氣が癒つたとか、商賣が繁盛したとか云ふやうな事である。が然し之れとても本宗の信仰は法華經の觀普賢經に說かれるが如く『深く因果を信じ、一實の道を信じ、佛は滅し給はずと知るべし』と云ふ立場から打ち樹てられた信仰であるから、自分の因果の然らしむ處或は信力の及ばざるが爲に眼に見へた御利益を頂く事が出來ないで、冥益即ち眼に見へない御利益を頂く場合もある。眼に見へない即ち冥益とは貧乏はして居るが信心のお蔭で身體が丈夫で、働いて居られるとか、一家が不平なく圓滿にゆけるとか、人が見たら苦痛だと思へる事が一向自分には苦痛とは感ぜずに、却つて大聖人が仰せらるゝ如く『信仰の强盛なるが爲に過去の罪障を現在に消滅する歟』と云ふ譯けで勇氣百倍の生活に立つ事が出來るが如き、是を第二の得益と云ふ。

で大體に於て御利益には『相待の益』と『絕待の

益」との二種有つて、今云ふやうな現世を中心とした顯益とか、冥益とかいふ御利益は、相待の益の方である。其處で第二の『絶待の益』とは法華經に連り、法華經に緣を結んだ以上は順緣（法華經を信じた人）逆緣（法華經に叛き逆つた人々）共に成佛の因を植へられたのであるから、必ず佛となると云ふ事これである。則ち信じた者は勿論佛果を得るが、逆つた者と雖もそれが緣と成つて、一生先きか、二生向きかで必ず佛果を得ると明して居る。衆生の佛性（世間では生命と云ひ佛教では佛性と云ふ）は永遠不滅であるから、法華經に緣を結んだ以上は順逆共に成佛の果を結ぶと教へるのである。

が斯ふ教へたからと云つても、御利益のみを目的として信心をしてはならないと、日蓮聖人は誡められた。それは何故かと云ふに、御利益ばかりを目標にして信心をした場合（上にも云ふ如く顯の利益、冥の利益と云ふやうな御利益があるのであるから）凡夫の常として眼に見へた御利益が無いと云ふ事になつたら信心を捨てゝ終ふだらふ、そればかりではない法華經は價値が無いと云つて法華經に傷をつけるだらう。それでは却つて初めは法華經を讃めたが、後には法華經の心を殺すと云ふ事になつて、罪障を造ることになると云はれて居る。日蓮聖人は吾れ〳〵に法華經を信仰せよとお教へになるが、その『信仰せよ』と教へられる信仰は御利益本意の信仰ではなくして、純粹の信仰、言ひ換へれば『精神生活の第一義』を言はれるのである。だから先師は

終日祈れども終日感なし、終日感なけれども終日悔なし。

と、いふ心境に立つて居られたのである。

それは次に有名なお言葉として

（日蓮を）天も捨て給へ　諸難にも値へ　我れ身命を期とせん（期とせんとは命をかけてやるの意）云云

と、云はれて居る。このお言葉を拜讀してみると如何に強く、如何に堅く法華經を信じて居られたかが窺へると共に、大聖人には御利益なぞは問題ではなかつたのである。その御信仰が『臭き頭を法華經に奉るは砂に黄金を代へるが如し』と仰せられるが如きであるから、金剛の如く堅く、然も高く精神生活の第一義に徹底し切つて居られたのである。我れ〳〵お互ひは大聖人の如く高德偉人では無いにしても、この純粹なる信仰だけは信者檀家となつて居る以上、その對面にかけても承繼やうに努力しなくてはならない。現在の門下の信者檀家、或は門弟達は何うであらう、天理教や佛立講と何等區別がつけられない有樣ではなからふか？　それで日蓮聖人の宗旨でご座ると云へやうか。

二　相待益と絶待益

相待益とは、前にも云ふ如く一時的の御利益を指していふ。吾れ〳〵は悲しい事に凡夫であるが爲に（理論としては佛と同一價値ではあるが）或る時は迷ひ、或る時は悟ると云つた樣に、感情に妨たげられたり、本能に引きづられたりして、信仰も行きつ戻りつ幾度か繰り返す譯であるが、其の中で受ける御利益を相待益といふ。

之れに對して絶待益とは即ち佛の救濟の徹底した後戻りのしない。御利益を得た事を云ふ。

それは、一生を通じて前後に一度惠まれる御利益で大概最後臨終の時を期して與へられる利益である。お互ひに生きて居る間は凡情と云ふものがあつて、何んな人間でも御利益を一度貰つたら、もうこれでいらないと云ふ樣な譯けにはゆかぬ。又人生の常として一度救濟を受けて艱難を切り拔けても、亦次に變つた苦痛艱難がヤッテ來る。其處で如來は『人生は苦なり、苦相續して絶へず』と斷定されたが如く苦は追ども去らずといふのが人生である、故に前に受けた御利益では滿足する事が出來ないで、更に新たなる御利益を欲する。古い諺に『迷中の是非は是非共に非なり』とあつて、成佛する迄は迷の世界に居るのであるから、失敗を繰り返しては幾度か後

戻りし、幾度か如來の救濟を仰ぐ、これが人生の大體の姿である。其處でこの迷中妄想の生活を貫ひて最後臨終の時に望んで、決定眞實の果報を得る崇高絶待の信仰を持つて居なければならぬ。佛教では最後臨終の時の種々な憶念妄想の中に於て最も正しい善なる一念を獲れと教へる。この臨終に望んで起す所のいろ〳〵な憶念の中で、一番強い一念が他の一切の雜念を拂つて、後の世の善業惡業を引くと說く（この一念が邪ならば惡業を引き、善ならば善業を引くと教へる）之れが佛教である。

故にこの最も大きな引力を持つ最後臨終の一念を正念にせねばならないと教ゆ。（この一念正邪に依つて永の生の善業惡業が分岐されると）日蓮聖人は『我れ幼少の時より佛法を習ひ候しが他事なし唯佛とならんと思ふばかりなり』と仰せられ、又

されば臨終の事を習ふて、後に他事を習ふべし云云

と、言はれて居る。之れが即ち日蓮宗の『安心立命』であるこの覺悟この決定信こそ一番大切なので常平素の信仰はこの最後臨終の正念を獲る爲である事を深く〳〵心に銘して置かねばならない。之れこそ眞の利益、眞の救濟であつて、これを絶待益と云ふ。若い中と云ふものは得てして現在の嬌やかな人生の表面（人生の裏面を見る事を知らぬ）丈を見て、それに心が奪はれ、それに本心を失つて夢中を彷徨て居るから、斯ふした深刻な問題は解らぬで居るが、時を經て人生の苦痛を嘗めて來ると必ず其事が解つて來る。彼のマルクス教徒が斯うした問題を輕く考へて居るのは、一面現在に於て差迫つた問題が有るからではあるが、やがては彼等と云へども覺る秋がある事を斷言して憚らぬ、古今東西の人類を見るのに、如何なる大化學者と雖も、最後は必ず宗教的立場に還つて來て居る事を以つてしも其事は明かで、況んや片片たる化學者に於てをやである。

結論

佛國土の建設

凡て佛教では十界と云ふ事を以つて、生きとし生ける一切のものを分けてゐる。此の十界を正報と呼び、その正報の住ふ處を依報と言ふ。

四土

（依報）
同居土……地獄界ヨリ天上界マデ
方便土……二乘界（聲聞緣覺）
實報土……菩薩界
寂光土……佛界
（正報）
十界

圖示すると四土の方は依報（住ふ國土）下の十界の方は住ふ人を示す即ち正報である。この中の同居土とは畜生も居れば人間も居る、佛も出られゝば菩薩も出ると云ふ。其處でこの國土を又は凡聖同居の國土とも云ふ。此の同居土の中に穢土と淨土との二ツの境涯がある。穢土と云ふのは水・火・風の三災に苦み惱む厭ふべき世界である、即ち苦を斷ち切る法を求めないでは居られない所、吾れ〳〵の娑婆が其の同居土の中の穢土である。

同居土の中の淨土とは、佛・菩薩の居玉ふ境涯をいふ。吾れ〳〵お互ひが求めて居る世界境涯は此の娑婆に即して如來の住み玉ふ世界、之れである。今『即して』といふ即とは、その儘と云ふ意味ではなくて『離れずして』との意味である。だから佛の淨土と凡夫の穢土とは相通ふて居る事をいふ。佛は此處に居玉ふて衆生を救濟せんと勵みたる即ち依報が當然得られる譯である、故に吾等衆生はこの娑婆世界を離れて別に極樂淨土と云ふが如き夢の世界を求めてはならない、と云ふのが我が日

給ふのである。吾等衆生が最後の目的たる成佛を得るならば、その成佛の正報に對して所居の國土境涯

蓮宗の淨土觀である。この娑婆を離れないで如來の住み玉ふ寂光淨土の有る事を知つて努力精進するのでなくてはならない、今お互ひは迷ふて居るが故に迷ひの穢土を住所として居るけれ共、やがて信仰增進のたまものに依つて佛果を得るならば、悟りの正報を得、正報に即して悟りの依報境涯を與へらる次第で、然も教主本佛世尊はこの同居の世界を說法教化の根據地として、更に十方の世界に應化を垂れ玉ふのである。壽量品に、

我れ常に此の娑婆世界に在て說法教化す、亦餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。云云

と、明し玉ふはこの謂をいふのである。吾等お互ひは此の本佛釋尊の常に在す事を信じて、救濟れなければならない一大事因緣のある事に覺醒て、さうして此の自覺から娑婆の上に、一大佛國土を建立すべく努力しなくてはならない、是れが吾等日蓮宗徒の總意としての最後の大誓願である。之れを云ひ換へれば一天四海皆歸妙法と云ひ、國土の成佛を期すと云ふのである。要するに本宗の信仰は個人の成佛のみを目當として居るのではなくして、妙法華經の旗風に靡かせやふとする大理想を持つて居るのである。故に此の理想實現の時までは吾等お互ひは努力を續けねばならない。其處でその理想實現の前提として先づ天神・地神も共に來つて拜し玉ふ處の法華本門事の戒壇を建てなければならない。然してやがて世界の平和を樹てしめると共に、世界をして佛國土たらしむべく力をいたさねばならない。之れを以つて本宗徒全體の大志願大目的として居るのである。お互ひにこの大願成就の曉までは努力を續けて、此の光榮ある日蓮宗徒の本分を全ふしたいものである。（以上）

佐渡の聖蹟を訪れて

磯部滿事

十月十六、七日は恰度日曜と祭日の二日續きの休暇だから秋の聖蹟參拜はどうですと、即ち一は小松川立正會の房州一巡と、一は同心會の佐渡行計畫があつた。相談の結果自分は遂に日頃憧れの佐渡詣に參加した。

十五日雨を冒して十時三十五分上野發夜行で、新潟へは翌朝七時四十分頃到着、直ちに連絡バスに依つて佐渡行の埠頭に運ばれた。佐渡汽船の第一船であるおけさ丸は生憎目下入渠中との事で、百八十噸足らずの第二佐渡丸が靜かに私共一行十人を迎へ入れた。空を眺めると一ケ月も降り續いたといふ雨も今朝はどうやら雲が切れてゐる、この分なれば佐渡は心配あるまいが、海上はモー十月であるから風はなくともうねりはあらうと、馴れたお客等は乘るが早いか横になつて用意周到だ。二等も三等も滿員で甲板に出て居る者も澤山あつた。自分もその一人である。そこには荷物が一杯で、船尾には鰯の氷漬が幾箱となく積み重ねられてあつた。

八時半ブーと名殘の汽笛を一聲、港口に向つた。突堤も過ぎ濁つた河水が紺碧の海水と變つた頃には、船は前後左右に搖れ出し、今迄景色に恍れた人も一人減り二人消え影をかくした。何しろ危くて立つて居られない、所謂木の葉の漂ふ樣で、時々機關の空轉も聞える。お客の顏色は皆蒼白で血の氣はない。思へば人生の荒波もこんなものか、否これ以上であるまいか。四時間ばかり揉みに揉まれ、搖れに搖れて實頃無事に兩津の波止場に横付され、始めて笑顏高聲が聞える、船暈は足一度大地に着けば忽ち跡方もなく消え去るものなんである。

私共は實食中に相談一決し、特に十六人乘のバス一臺を賴んで希望通りの聖蹟一巡に急いだ。船客中に佐渡のお百姓らしい人が「皆佐渡佐渡といつて來るが、何を見るだか、不思議でなんネー」といふ。普通遊覽バスでは尖閣灣や相川、或は鑛山見物か金北山乃至七浦海岸、小木等が擇ばれて、史蹟

は第二の樣に見受ける、日蓮聖人の靈場別して一の谷等は少し入り込んでゐる丈けに特種の關係にある者の外は訪づれないらしい、私共は寧ろ物質的の金山よりも、大聖人の御精神大聖人の御跡をお慕ひ申すのである。本多上人高著開目鈔詳解の序文に、

世の日蓮主義を鐵仰する人は勿論、苟も東洋文明の權威を知らんと欲する者は、心ず開目鈔を熟拜して其眞意に徹底すべし。日蓮聖人の開目鈔を讀まずして東洋の文明を談ずるは僭越なり、況んや日蓮主義者と稱するをや、世の人皆く佐渡の地には黃金を產するを知るも未だ閻浮第一の寶玉を出せるを識らず、嗚呼慨すべきなり。

と、又以て知るべきである。世間では日蓮聖人を一宗一派の坊さんと思ふ程度で淺間しい。然り而して大聖人は佛敎の分裂を歎じて遂に如來使の面目統一的本尊を圖顯遊ばした宗門第一の靈場一の谷、又順德天皇と聖人とは精神的に貴い御つながりがあるべきを拜察する。夫等が幸にも中央佐渡平原に殆んど離つてゐることは洵に有難い。

午後一時十分一行は兩津を出發して有名な加茂湖を右近くに、遠く金北山を遙望しつゝ約廿分の後に早くも多年憧がれの塚原山根本寺に着いた。

文永八年十月二十七日、大聖人は越後角田より佐渡松ケ崎に向はれて初冬の荒海を一日かかりで十里の波濤を乘り切られた、それは私共の渡航とは全然比較にならぬこと勿論である。そして松ケ崎から約三里の雪の細道を過り十一月一日に塚原にお着き遊ばしたが、何しろ食なく、家らしいものなく三昧堂とは名ばかりであらう。而かもこゝで開目抄二卷「此文の心は、日蓮に依て日本國の有無はあるべし」とも、「弟子どもに內內申す法門、——此法門出現せば正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出でゝ後の星の光、巧匠の後に拙を知るなるべし」と自信たつぷりの大著を四ケ月かゝつてお書き下さつた御不便も略拜察出來やうと、私共は夢中で飛付くやうに三昧堂の御遺蹟を拜した。併しそこには唯ハラ〳〵と泗の傳ふばかり……やがて石垣の前で御振舞抄の一節を拜讀し唱題した。

文永九年十月十日に佐智を立つて同十月二十八日に佐渡の國へ著きぬ。十一月一日に六郎左衞門が家のうしろみの家より塚原と申す山野の中に、洛陽の蓬臺野のやうに死人を捨つる所に、一間四面なる堂の佛もなし、上は板間あはず四壁はあばらに雪ふり積りて消ゆる事なし。かゝる所にしき皮打しき蓑うちきて夜をあかし日をくらす。夜は雪霰雷電ひまなし、晝は日の光もささせ給はず心細かるべき住居なり……。

これこそ聖人の實感そのまゝであらう。何等其處には文飾もなければ誇張もない。來て見ると直ぐに味識することを得、

總身栗立つ。遠藤爲盛の來襲もこの邊から狙つたのかと憶測し、萬感胸をうつて立り去り幾ね垣の周圍をグル〳〵廻つたせめてもの記念にと一行は撮影した。促がされて本堂に詣り御寶前に唱題し、かの血のしたゝる樣な佐渡御書もこの邊で筆をお執りになつたかと見まわす。

二時此處を辭して僅かに十分、日朗坂にかゝり、その右方なる順德帝第一皇女の御墓を拜し、約廿分過ぎて一老松を見る。これは日野資朝卿が本間三郎の爲めに斬られたので、一子阿新丸十三歳、父の仇を報じて遁れかくれたといふ靈樹、何等か人々に敎へを垂れつゝある感がする。

その隣りに在る蓮華王山妙宣寺、通稱阿佛坊を間道から訪づれた。此寺は承久の昔、順德天皇に奉侍した遠藤左衞門爲盛が、大聖人の尊を耳にして一刀の下に念佛の敵日蓮房を斬伏せんとして却て說伏され、兩來妻の千日尼と共に奉仕しつ、遂に弘安元年其邸宅を淨舍にしたといふ、其子盛綱は出家して日滿と號し、北國に於ける宗門の棟梁とされた。

今こそ自動車で塚原迄は半時間であるが、昔し此所から雪の夜も暴の空にも人知れず食を運びまめ〳〵しく仕へた千日尼の精進こそは眞似も出來難い。日蓮聖人晩年身延山よりの千日尼抄には

いかにも命助かるべきやうはなかりしに、天の御計ひはさておきぬ、地頭地頭、念佛者念佛者等、日蓮が庵室に晝夜に立ちそいて通ふ人もあるをまどわせんとせめしに、阿佛房に權を背負せ夜中に度度御わたりありし事いつの世にか忘れむ、只悲母の佐渡の國に生れかわりて有るか……。

當山はその境內も本堂も庫裡も佐渡三本山中の隨一である。正門に入れば直ぐと日野二位公のお墓がある、墓とても名ばかりの極く簡單な細い石柱であるが、又自ら强い刺戟を與へられる。それから正門近くに佐渡としては唯一の五重の塔が立派に聳えてゐるも嬉しい。

此所を辭して眞野宮に向ふ途中、その昔、聖武帝の勅旨で佐渡最古の巨刹國分寺（現在のものは遙ふ）を過ぎ三時眞野宮を拜して山陵に登つた。公稱眞野山御火葬塚と申し上げ、順德天皇崩御後の靈跡である。眞野灣の一角、小丘の鬱蒼たる赤松の森こそ御陵域である。

御　製

思ひきや雲のはてまで流れ來て
　眞野の入江に朽ちはてんとは

明治二十二年御陵は山城國大原に御移しになつたが、現在でも御陵と同一の御取扱になつて、陵墓守長長藤藏氏が二十年以上奉仕されて居る。氏は私共一行が謹嚴な唱題を御陵に對つて捧げた事に非常な感激を持つて謝意を表され、今や我國は日蓮聖人の立正安國論を再檢討すべき重大期と思ふ、日蓮聖人の主義主張こそ眞に我精神界の大燈明であり、追慕して

止まぬ、聖人と承久亂に對する關係は深長なる意味を藏すべきを確信する者であるとして其著「承久の亂に於ける順德天皇と佐渡」の結論に大聖人御遺文及び神皇正統記と、山陽の論文が揭げられてあることを見ても、そのお心持ちが能く推察出來る。而して氏は此所へも澤山の日蓮宗信者は詣られても、多くは穢れた御利益信心で遺憾に堪えないと護法憂國の至情を發露された事は、この參拜中唯一の知己を得た樣に思はれ大きな歡であつた。

三時半北上して腰掛松を拜し、河原田の松原が丁度三保の松原の感があるを左に眺めつ四時曉望せる一の谷に着いた。一の谷は地名市之澤であつたが、大聖人本化の使命を完ふせられてから、一谷即ち「はじめてきわむ」とお書きなつたのが、現在に及ぶと傳へられて居る。文永九年四月七日鎌倉幕府から本間左近勝利の副狀を以て塚原から市之澤なる一の谷入道近藤伊豫守清久の館にお移し申上げたものである。

爾來文永十一年三月十三日この御草庵を御發足になる迄の三年間には「日蓮一期の大事」と仰せられた觀心本尊鈔、續いて「佛滅後二千二百二十餘年の間一閻浮提之内未曾有の大曼荼羅」を始めて顯はされ、彌々出世の本懷を究め盡された最も貴い靈蹟中の靈蹟である。「如說修行鈔」「顯佛未來記」「當體義鈔」等々重要御書三十餘通は此所の御執筆にかゝるものである。

自動車道から幾十百の石段を下つて谷間の本堂に達する、而して左の上に御草庵の跡を拜し、御常用の井水を手にして感激轉深い。

此所から數町東に歩いて御松山實相寺に達した、大聖人は毎度此地に登つて日月を對手に讀經唱題されてゐたと傳ふ。

御遺文には、

念佛者の長者の唯阿彌陀佛　持齋の長者の性論房　良觀が弟子の道觀等、鎌倉に走り登りて武藏の守殿に申す。「此御房島に候ものならば、堂塔一宇も候べからず、僧一人も候まじ、阿彌陀佛をば或は火に入れ或は河にながす、夜も晝も高き山に登りて日月に向つて大音聲を放つて上を呪詛し奉る、其聲一國に聞ふ」と申す。

境内に老松あつて其の傍で誦經されたらしい、今は稚松其の跡に植えられて淋しい。

五時實相寺を名殘りにして、黑木御所跡に數分間で乘付けた。順德天皇二十二年間の御所跡で洵に聞くも涙である。黑木といふは丸木で新鉋もあたらぬ皮付きの甚だ粗末の造作を意味するのである。今は數間四方の神々しい桓が廻らされて拜する者の胸うたる。附近の御腰掛石や、龍燈松の古跡は、白菊と共にその昔を一入偲び奉る。道路の反對側に法敎山本光寺、俗に泉の觀音と稱する順德天皇御守本尊、聖德太子の御作といふ御丈三尺三寸餘の立像觀世音菩薩の國寶がある。

少し東すれば中興に達する。中興の邑主であつた近藤次郎信重、父は一の谷入道で淨土宗であつたが、聖人の尊容に接し文永九年五月五日改宗し、聖人に歸伏し、受戒して諱を法妙院日學と號せられた。そこで伊州清久は長年信仰してゐた阿彌陀佛像を聖人に奉り、聖人は之を開會して金銅釋迦牟尼佛と開眼されて一の谷御草庵に安置されたといふ。後年身延より送られた一谷入道御書に

文永九年の夏の比、佐渡の國石田の郷一谷と云ひし處に有りしに、預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ、父母の敵よりも宿世の敵よりも惡げにありしに、宿の入道と云ひ妻と云ひつかう者と云ひ、始はおぢをそれしかども、先世の事にやありけん、內內不便と思ふ心付きぬ。預りより預かる食は少し、付ける弟子は多くありしに、僅の飯の二口三口ありしを或は折敷に分け、或は手に入れて食しに、宅主內內心あて外にはおそるゝ樣なれども、內には不便げにありし事何の世にか忘れん、我を生ておはせし父母よりも當時は大事とこそ思しか、何なる恩をも勵むべし、まして約束せし事たがうべしや。……

この父清久よりも子の信重の方が遙かた信仰强盛であつたらしい、弘安二年十一月末中興入道消息中に

貴邊は故次郎入道殿の御子にておはするなり、御前は又嫁なり、いみじく心かしこかりし人の子と嫁とにおはすれば

や。故入道殿のあとをつぎ、國主も御用ひなき法華經を御用ひあるのみならず、法華經の行者を養はせ給ひて年年に千里の道を送り迎え、云云。

と、これで大略察するに餘りあらう。

佐渡平原を秋晴のスツキリ澄んだ晩景にドライブすることも大に旅情を慰める。殊に渡邊車掌が美い聲で「皆樣に申上ます、左にあるアノ一本の淋しさうな松は、その昔しお伊勢詣り……云云」のローマンスを聞かせたり、時々おけさ節を唄つては一行を歡ばせる。

モーあと十分位で兩津に歸着するといふ時、左側にある薄暗い繁茂せる森林續を指して、「あすこは豬の森と申します、あの附近を通過する人は皆行途不明となり、二三日後に悲な姿となつて捨てられるので若い勇士等が、吾れこそ退治せんと出かけても、三ツ目小僧や一本足の入道に引込まれるので佐渡は恐しい所だ。佐渡の人は豬だといふ惡評がパツト立ちました、私共甚だ殘念に存じます。佐渡人は決してそんな豬のやうに人を瞞かすことは致しません、どうぞ皆樣は私共の爲めかゝる寃罪を濯ぐべくお力添をお願申上げます」と、最後の處で何だか船著き場所は御用心なさいといふ樣にも聞えて、こそばい氣持もしたが大に拍手した。間もなく兩津に一軒だといふ日蓮宗信者青木旅館前に停車し、丁寧な相田運轉手と親切な渡邊車掌に厚く感謝して別れ、ヤレ〳〵といふや

うな心の弛と共に、再び凡愚の我に返つたのは正に五時五十分であつた。

佐渡は靜かである。景色の國、史蹟の國、唄の國といはれる。暮しよさそうに見受ける、從つて刺戟が尠ない、道念も起るまい。折角の宗教的靈境を控えつゝも、題目の聲もお寺の鐘も聞へず何だかもの足りない。積極的態度に出られねばせめて消極的にも大聖人の靈蹟を森嚴に保持し、稻荷等の祠は取除いて、大聖人御在世を深刻に味はしむべく切望する。

長期建設には國民の宗教心を涵養することが先決問題であらう、佛教を知らずして精神文化を口にすることは出來まい日蓮聖人を知らずしては佛教の心髓は把れない、大聖人を知るには文書よりも先づ靈蹟を拜することである、其の靈蹟は澤山あるが、何と申してもこの佐渡が根本正宗であるまいかその佐渡が今のやうな有樣ではと識者の御一考を促す次第である。

さて翌朝八時半發、新潟行の第二佐渡丸に復船して同晩八時半上野に歸着、道中繁ければ記さず。二晝夜に足らずして佐渡の靈蹟を一巡し得た事、而も房總の風雨强かりし由なるも、佐渡の快晴等諸事好都合に運んだことは偏に大慈大悲のたまものと衷心より感恩のお題目を南無妙法蓮華經と高唱して筆を擱く。

團費誌料維持費及寄附金領收（自九月二十一日至十月二十日）

一金五　圓也　靜岡縣　八木東興殿
一金拾　圓也　東京　佐藤梅太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　岡山縣　妙覺寺殿
一金五　圓也　東京　山田英二殿
一金五　圓也　山梨縣　山本禮三郎殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　吉村頼治殿
一金貳圓貳拾錢也　同　荒木蓮成殿
一金貳圓五拾錢也　東京　高橋福一郎殿
一金貳圓五拾錢也　盛岡　阿部秀三殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　内田義久殿
一金壹　圓也　同　石井幸生殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　石川利惠子殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　小田末治郎殿
一金貳圓五拾錢也　同　森千代殿
一金壹圓貳拾錢也　名古屋　石上長作殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山縣　妙覺寺殿
一金九　拾　圓也　東京　井上道太郎殿
一金貳　拾　圓也　同　柴田武治殿

右難有入帳仕候也（以是代領收證）

財團法人統一團會計

日珠上人小傳

日珠上人字は了本、本妙院と號す。父は岡山の醫師井上隆安、母は安藤氏。岡山縣赤磐郡烏取上村大字斗有（とあり）に產る。

天性頴智、幼にして州學に學び、深解院日範師に付いて得度す。次て普應院日恩師に本化の教義を習ひ、天台の教說を極む。後本妙庵を再興し大教庵主となる、上人每に先蹤を踏みて國家諫曉の大願を懷く。故に寛政五年其大願を果さんが爲に廿四日間の斷食行をなし、不受不施再興祈願の爲、岡山縣和氣郡益原に大覺大僧正自建立の祖師三聖人の墓前に妙經百萬部を奉備し、紀念に其の側に奉備百萬部の大寶塔を建立し裏面に其の由を記せり。又備前赤磐郡矢原に身延第十一世行學院日朝聖人の石碑を刻みて報恩に備ふ。然る後法花眞正行一卷を選して幕府を諫曉す、素志達せず、加之遂に同年夏三宅島に謫せらる。文化五年天下安全抄三卷を著して再度幕府を諫曉せんと計られしも遂に其の機を得ず。在島二十五年、文政元年一月廿一日化す。時に世壽五十有六也。

其の臨終の狀に曰く、一日某に告げて曰く、吾が化緣既に盡く、命終の期明朝にあり、唱題の聲絶ふるを待ちて之を開けよと、云云。即ち沐浴淨衣を着し、棺に入り肅々玄題を唱ふ、某明日到り見れば唱題の聲なし、依て靜かに棺を開くに安詳として示寂されたるありと。

著書法花眞正行一卷、後諫手引草上下二卷、天下安全抄三卷、適時信規論一卷、三新規則一卷あり。其他弟子信徒へ與へられたる書翰多數あり、隨所に本化の教說を述べて隨自隨他の化導多し、中には堂々たる所論尤に一卷の著述に比するもの多し。

又師詩文和歌に長じ、其遺墨を檢するに妙教を詠して餘りなし。實に本妙院日珠上人は不受不施禁止中興之英哲也。

記事

本部團報

銃後後援强化週間　十月五日より一週間この實施要綱を提示され、且つ九月下旬に東京府教化團體聯合會の懇談會席上でも打合せあつたので、本部に於ては十月九日午後二時より、日蓮聖人非滅現滅の聖月でもあれば、先づ謝恩法要と引續いて事變陣歿將兵の追福を修し、皇軍武運長久を祈つて後、教化講演會を開催し、河合陟明氏の「開會の辭」、磯部滿事氏の「立正安國の大精神」及び最後に小林一郎氏の「教化と宗教」と題して銃後の市民に對し適切深刻な訓化を與へられ、滿堂大なる感激に充されつ午後五時過散會した。當日は遠く横濱からも參列されて居た。

日曜清集　毎日曜日は午後二時より五時頃迄勤行と法話が御實前に展開されてゐる、尤も十六日は臨時休會であつた。

御書講座　昨年十月中旬より小林一郎先生に依つて觀心本尊鈔が詳しく解明されて居たが、丁度滿一ヶ年の去る十月十一日第三十八講を以て完了された。

現今の世相に鑑み、今回大聖人異生の御主張である立正安國論の拜講を續けらるゝ事となつたのは實に有難い事である。特に青年の人々の來聽を歡迎する。

福商同窓會　商大の橋本辰居氏が忙しい學業の寸暇御盡力になつて、母校福島高商出身の在京鐵仰會有志が、毎月一回本部に參集して信仰增進に努力されて居る。先般山口喜一氏の京城榮轉と增井昇氏の應召とで淋しい思がするけれ共、何れ新顔も見受るであらう。在學中の理想も、實社會に出れば多分に裏切られるやうの事もあらうし、世間の濁惡汚泥中にあつて、猶且つ蓮華の如き芳香を持たうとするには、どうしても正しい宗教の力に俟つべきである。信は道の元といふ事は始めて味識される。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價 送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	仝	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		仝	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		仝	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰		仝	金拾五錢
法華經要品		仝	金五拾錢
日生上人レコード（四面）		仝	金參圓廿五錢
日蓮聖人		仝	金拾錢
本尊意識に就て		仝	金貳拾錢
釋尊の八相成道		仝	金貳拾錢
法華經の心髓		仝	金壹圓五拾錢
磯部滿事講師 本多日生上人		特價 送料共	金壹圓七拾錢
動行作法		仝	金拾錢
佛教の心髓		仝	金壹圓
河合陟明著 皇道と日蓮主義		定價 送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七

財團法人 統一團出版部

振替東京九四二〇番

統一定價

一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意

▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候事
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十三年十月廿七日印刷納本
昭和十三年十一月一日發行
（第五百二十四號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京市四谷區内藤町一
印刷人　山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

佛教の根本と其の應用（其七）……本多日生
開目鈔講話（第二十五講）……小林一郎
偶感……金子光和
成佛と淨土論……中村清一
日蓮聖人の主張……梶木顯正
記事
○本部團報　○福島支部報　○酒悅立正青年團報
○福島高商同窓會　○團費誌料寄附金及維持費領收
大藏經要義續篇（其十四）……本多日生

第四十三年　十二月號

14.1.4